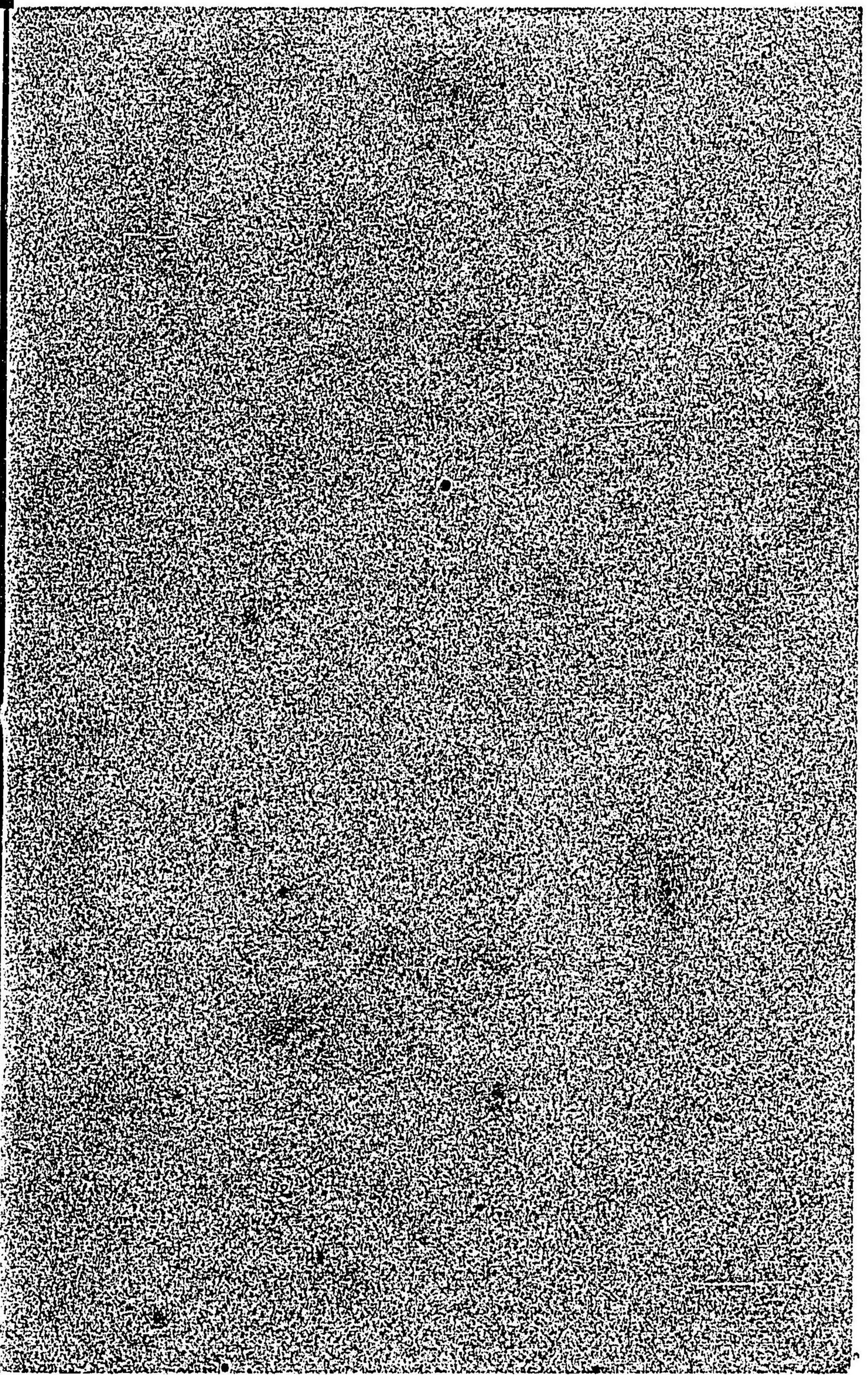
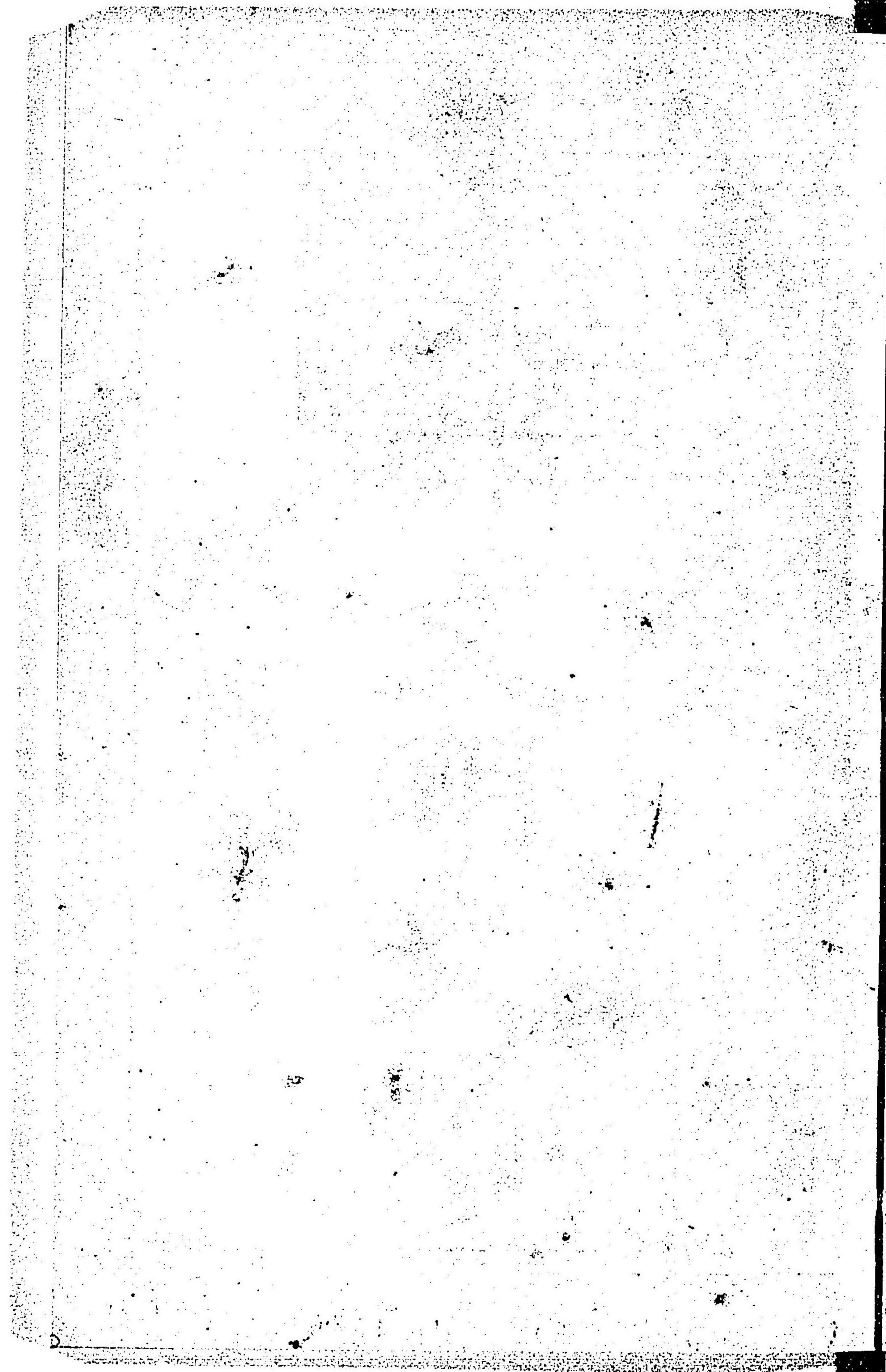


青山正夫著

卷六

支那文明史略

文海堂發兌



特20
86

WE19076/22

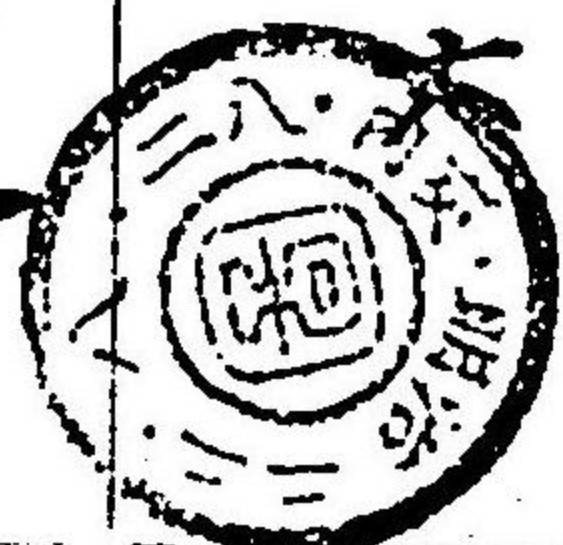


青山正夫著

卷之

文明史略

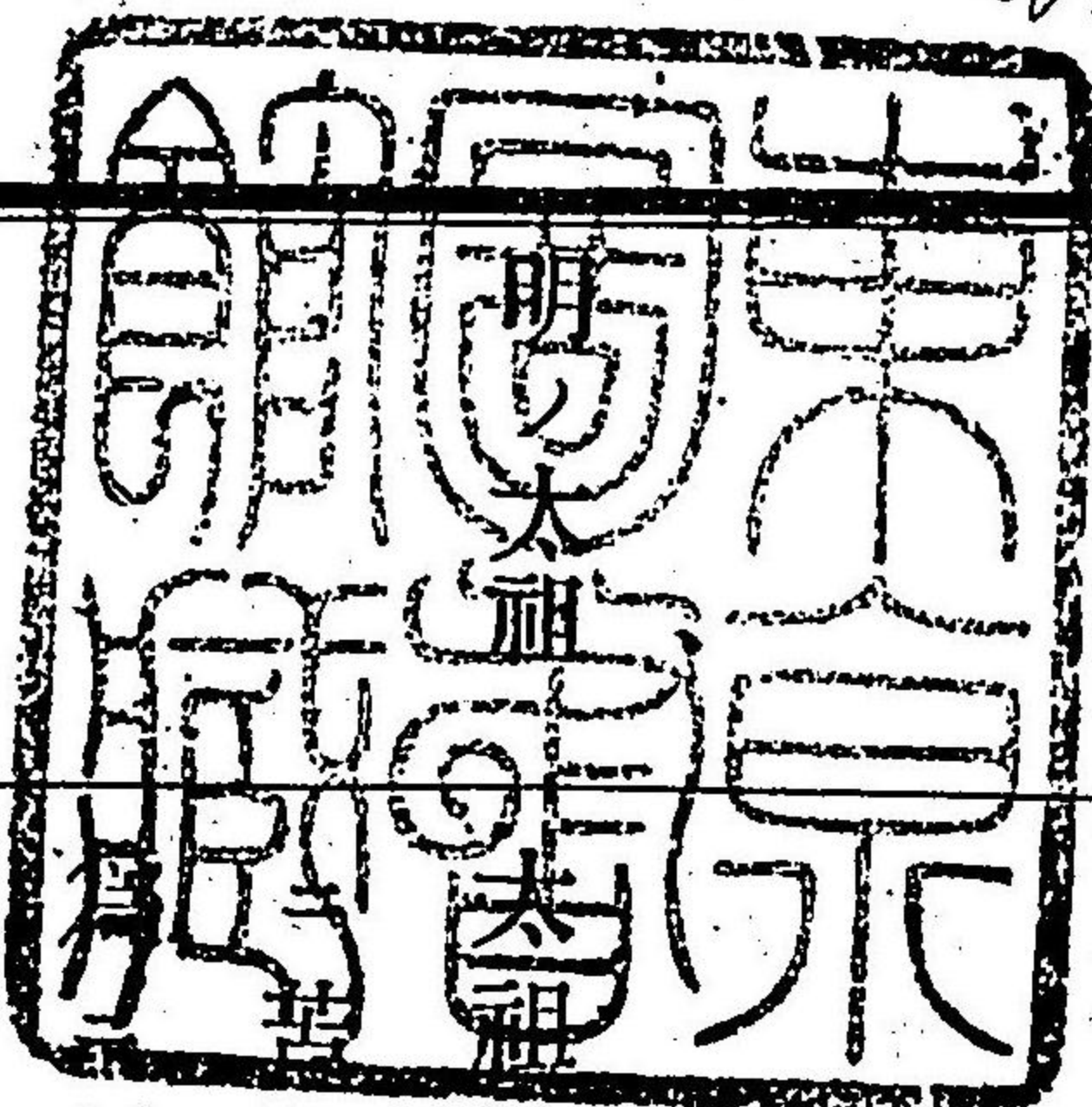
版權所有



明ノ圖



No. 19076 / 22



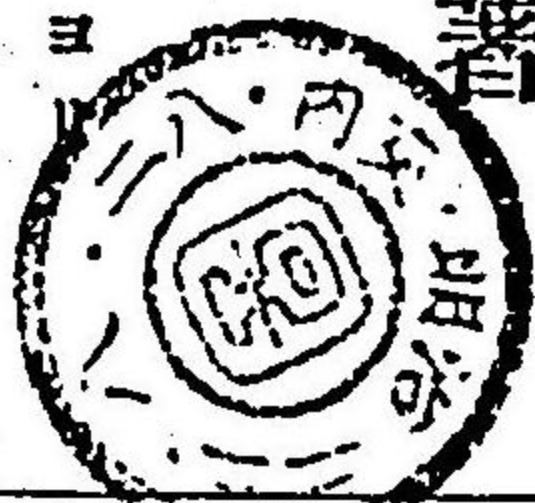
支那文明史略卷之六

青山正夫 著

第三十一章

明

神武紀元二千〇二十八年ヨ
同 二千三百〇四年マテ



姓ハ朱名ハ元璋濠州ノ人ナリ、少時常ニ病
シム、父僧ト爲サント欲ス、後、父母及兄、疫ノ
死ス、家貧ニシテ歿スル能ハス、帝仲ト屍ヲ
昇シテ、山麓ニ至ル、縋絶ツ、仲還テ縋ヲ取り、帝ヲ
留メテ、之ヲ守ラシム、忽チ雷雨大ニ起ル、帝村寺
ノ中ニ避ク、曉ニ至テ往テ視ル、土墳起シテ、高壟

三
ヲ成ス、因テ歸ル、尋テ仲又死ス、帝時ニ年十七、遂
ニ皇覺寺ニ入テ僧トナル、後所在兵起リ、定遠ノ
人、郭子興、濠州ニ據ル、帝子興ニ屬シテ親兵トナ
リ、攻伐アレハ輒テ往ク、往ケハ必ス勝ツ、子興、馬
氏ノ女ヲ養テ、己カ女トナシ、遂ニ帝ニ妻ハス、即
チ高后ナリ、帝大志アリ、鄉里ニ歸リ、兵ヲ募ル、徐
達、湯和、馮國用、常遇春、劉基、宋濂、等來リ屬ス、子興
死スルニ及テ、其兵ヲ統ヘ、諸將ヲ率ヰテ、連リニ
諸州ヲ陷ル、其鎮江ニ克ツヤ、士卒ヲ戒メテ曰ク、
吾レ兵ヲ起セシヨリ、未タ嘗テ妄殺セス、今爾等

亦當サニ吾カ心ヲ體スヘシ、城下ルノ日、焚掠殺
戮スル勿レ、令ヲ犯カス者アラハ、處スルニ軍法
ヲ以テモント、號令甚タ嚴肅ナリ、故ニ天下ノ豪
傑多ク心ヲ歸シ、遂ニ上都ヲ陷レ、洪武元年、群臣
ノ勸進ニ由テ、帝位ニ即ク、國ヲ明ト號ス、
妃、馬氏ヲ立テ皇后トス、帝初メ江ヲ渡ル時、后、帝
ニ謂テ曰ク、今豪傑並ヒ争フ、未タ天命ノ歸スル
所ヲ知ラスト、雖モ、妾ヲ以テ之ヲ觀レハ、惟、人ヲ
殺サ、ルヲ以テ本トス、人心ノ歸スル所ハ、即チ
天命ノアル所ナリ、帝深ク之ヲ然リトス、是ニ至
ナル

馬氏皇后ト
ナル

テ冊立シテ皇后トス、帝因テ侍臣ニ謂テ曰ク、昔光武馮異ヲ勞シテ曰ク、倉卒蕪蕪亭ノ豆粥、滹沱河ノ麥飯、厚意久シク報セスト、朕念フニ、皇后布衣ヨリ起リ、常ニ倉卒ノ際、自ラ飢餓ヲ忍ビ、糗餌ヲ懷ニシテ、朕ニ食ハシム、之ヲ豆粥麥飯ニ比スルニ、其困尤モ甚クシ、昔唐ノ太宗ノ皇后、太宗ノ兄、建成ト隙アルニ當テ、内能ク孝ヲ盡シ、謹テ諸妃ニ承ケ、嫌疑ヲ消釋セリ、朕素ヨリ郭氏ノ疑フ所トナル、然レモ、后郭氏ヲ慰メ、寬解シ、朕ヲシテ卒ニ危難ヲ免カレシメタリ、是レ太宗ノ后ニ過

太祖ノ行爲

キタリ、朕或ハ服御ニ因テ、小過ヲ詰怒ス、輒チ朕ニ勸メテ曰ク、王昔日ノ貧賤ヲ忘ル、カト、朕爲ニ惕然タリ、家ノ良妻ハ猶ホ國ノ良相ノコトシ、豈之ヲ忘ル、ニ忍ンヤ、朝ヲ罷メ、因テ以テ后ニ語ル、后曰ク、妾聞ク夫婦相保ツハ易ク、君臣相保ツハ難シト、妾固ヨリ、太宗ノ皇后ノ孝儉ナルニ如カス、但願クハ陛下堯舜ヲ以テ法ト爲ン耳、太祖ハ其身布衣ヨリ起ル、漢ノ高祖ニ似タリ、初メ兵ヲ起ス時、天下ヲ平クルノ策ヲ、李善長ニ問フ、善長曰ク、漢ノ高祖布衣ヨリ起リ、豁達大度、人

六
ヲ知テ善ク任ス、五年遂ニ帝業ヲナス、公ハ濠ニ
産ル、沛ヲ去ル遠カラス、漢ノ高祖ノ爲ス所ニ法
トヲハ、天下定ムルニ足ラサルナリト、故ニ明祖
ノ胸中、一ノ漢高アリテ、其行事、多ク之ニ倣フ、鼎
ヲ金陵ニ定メ、都城ヲ建ツルヤ、宮闕壯麗ヲ極ム、
卽チ蕭何ノ未央宮ヲ造ルノ例ナリ、又江南ノ富
民十四萬戸ヲ中都ニ徙ス、漢高、齊楚ノ大族ヲ徙
シ、以テ關中ヲ富實ニシタルノ例ナリ、又子弟ヲ
各省ニ分封シ、以テ王家ノ藩屏ダラシメタリ、又
大獄ヲ起シテ、功臣ヲ誅戮セリ、皆漢高ニ同シ、而

シテ其刻薄ナル之ニ過キタリ、諸子ヲ封シテ王
トスト雖モ、兵食ノ權ヲ以テ之ニ委テス、兵ハ但
護衛ヲ存スルノミ、漢高ノ功臣ヲ誅スル、固ヨリ
殘忍ナリト雖モ、亦其叛ニ因テ之ヲ誅シ、或ハ謀
反ノ端アルヲ見テ之ヲ征討セリ、明祖ハ功臣ニ
由テ天下ヲ取り、天下既ニ定マルニ及ンテ、盡ク
天下ヲ取ルノ人ヲ擧ケテ、之ヲ殺ス、其殘忍實ニ
甚ダシト謂フヘシ、
元ノ末ニ當テ、吏治弛ミ、人民ノ凋衰セルヲ見テ、
官吏ニシテ民害ヲ爲ス者アレハ、極刑ヲ以テ之

明初ノ吏治

ナ處ス、然レモ毎ニ賢良ヲ旌擧シ、以テ專ラ法ニ任セサルヲ示セリ、又或ハ士民ノ請ニ因テ、良吏ヲ留メテ秩ヲ進ム、又吏ノ事ニ坐シテ逮ヘラル、モ部民ノ請ニ因テ、其官ヲ復スルカ如キユトアリ、嘗テ地方官ノ來朝シタル時、帝之ニ諭シテ曰ク、天下初テ定マル、百姓財力俱ニ困シム、故當今ノ方、恰モ初メテ飛フノ鳥ハ其羽ヲ拔ク可ラス、新タニ植ウルノ木ハ其根ヲ搖カス可ラス、之ヲ安養生息スルニアルカ如シ、爾等深ク之ヲ念フヘシト、又嘗テ戸部ニ諭シテ曰ク、國家賦稅已

ニ定マル、用度ヲ樽節スレハ、自ラ餘饒アリ、民ヲシテ力ヲ農桑ニ盡サシムレハ、自ラ家給シ、人足ル、何ソ聚斂ヲ事トセント、太祖ノ後、諸帝亦意ヲ吏治ニ加ヘ、往々特ニ敕シテ之ヲ獎勵セリ、又貪吏ハ重ク之ヲ罰シタリ、洪武十八年、詔シテ天下ノ官吏、民害ヲ爲ス者ヲ逮捕シ、京師ニ赴キ、城ヲ築カシム、又官吏ノ罪アル者、笞以上、悉ク鳳陽ノ屯田ニ謫ス、萬餘人ノ多キニ至ル、凡ソ守令ノ貪酷ナル者アレハ、人民ヲシテ京師ニ赴キ、陳訴スルヲ許ルセリ、贓六十兩以上ニ至ル者ハ、梟首シ

胡藍ノ反

テ衆ニ示ス、其吏治ニ嚴ナル斯ノ如シ、
帝、胡惟庸ヲ以テ右丞相トス、帝嘗テ劉基ト相ト
スヘキ者ヲ論シ、胡惟庸ニ及フ、基曰ク、此レ小犢
ノミ、將ニ轅ヲ賃シテ犁ヲ破ラントスト、後遂ニ
相トス、基、大ニ憾テ曰ク、吾カ言ヲシテ、驗アラサ
ラシメハ、蒼生ノ福ナリト、洪武十三年、惟庸逆ヲ
謀リ、誅ニ伏ス、惟庸誑テ曰ク、居ル所ノ第ノ井中
ニ、醴泉湧出スト、帝ヲ邀ヘテ往キ觀セシメ、因テ
弑セントス、駕、西華門ヲ出ツ、内使雲奇、其謀ヲ知
リ、走テ躡道ヲ衝キ、馬ヲ勒シテ狀ヲ言フ、舌馱シ

テ意ヲ達スル能ハス、帝、其不敬ヲ怒ル、左右亂打
シテ奇ノ臂幾ト折ル、尙ホ惟庸カ第ヲ指シ、爲ニ
痛縮セス、帝悟リ、城ニ登テ眺察スレハ、惟庸カ第
内ニ、兵甲屏帷ノ間ニ伏スルヲ見ル、即チ兵ヲ發
シテ掩捕シ、拷掠シテ狀ヲ得タリ、因テ惟庸ヲ市
ニ磔シ、悉ク其黨ヲ誅ス、連坐スル者三萬餘人ア
リ、後十餘年ヲ經テ、涼國公藍玉逆ヲ謀テ誅ニ伏
ス、藍玉ハ常遇春ノ妻ノ弟ナルヲ以テ、征伐ニ從
ヒ、功ヲ累テ大將軍ニ至ル、素ヨリ不學ナリ、性復
タ、狠愎、功ヲ恃テ暴橫、初メ胡惟庸ノ叛ニ、玉謀ニ

與カルト稱スル者アリ、帝其功ノ大ナルヲ以テ、之ヲ宥ルス、是ニ至テ遂ニ反ス、密カニ部曲ヲ召シテ謀議シ、士卒及家奴ヲ集メ、甲ヲ伏セテ將ニ變ヲ爲ントス、約束已ニ定マル、人之ヲ告クルアリ、捕訊シテ誅ニ伏ス、列侯已下、連坐シテ論死スル者、萬五千餘人アリ、

燕王兵ヲ舉ク

太祖崩シテ、太孫建文帝立ケ、幾何モナク燕王ノ反アリ、燕ハ元朝ノ舊都ノアル所ニシテ、其人民ノ富強ナル、實ニ京師ニ敵スルニ足ルモノアリ、且燕王ノ武勇ヲ以テ此ニ據リ、朝廷ノ命モ懼ル

ハニ足ラストシ、敢テ詔ヲ奉セス、建文帝即位ノ前、既ニ之ヲ削ラント欲シ、策ヲ黃子澄及齊泰ニ問フ、子澄等對フルニ、漢ノ七國ヲ削ルノ事ヲ以テス、因テ即位ノ後、子澄等ニ命シテ、周、齊、燕等ノ諸王ヲ削ラントス、是ニ於テ、燕王兵ヲ舉ケ、齊、泰、黃子澄ヲ誅シ、君側ヲ清メ、周公ノ成王ヲ輔クル故事ヲ以テ名トシ、兵ヲ靖難ト稱ス、詔シテ燕王ノ屬籍ヲ削リ、大兵ヲ發シテ之ヲ討タシム、大戰數回、互ニ勝敗アリシカ、燕軍遂ニ京師ニ逼ル、方孝孺曰ク、事急ナリ、地ヲ割テ和ヲ求メ、以テ四方

勤王ノ師ヲ俟ツニ若クハナシト、乃チ使ヲ遣ハシテ燕王ニ説ク、王從ハス、帝祝髮シ、服ヲ變シテ出奔ス、後三十九年、英宗ノ時、京師ニ至リ、宮ニ入り、壽ヲ以テ終フ、

方孝孺等節ニ死ス

燕王位ニ即キ、方孝孺ヲ召ス、屈セス、之ヲ獄ニ繫ク、帝即位ノ詔ヲ草セシメント欲ス、乃チ召シテ獄ヨリ出ス、孝孺斬衰シテ入テ見エ、悲慟スルコト甚ダシ、帝曰ク、我レ周公ノ成王ヲ輔クルニ法トルノミ、孝孺曰ク、成王安ニカアルヤ、帝曰ク、是レ自ラ火ニ焚ク、孝孺曰ク、何ソ成王ノ子ヲ立テ

サル帝曰ク、國長君ニ頼ル、孝孺曰ク、何ソ成王ノ弟ヲ立テサル、帝榻ヲ降り、勞シテ曰ク、此レ朕カ家事ノミ、先生過キテ勞苦スルコト毋レト、左右筆札ヲ授ク、帝曰ク、天下ニ詔スル先生ニ非レハ不可ナリ、孝孺燕賊國ヲ篡フノ數字ヲ大書シ、筆ヲ地ニ擲テ、且哭シ、且罵リ曰ク、死セハ即チ死センノミ、詔ハ草ス可ラス、帝怒リ、刀ヲ以テ其口ヲ抉シテ、兩耳ニ至ラシム、又之ヲ獄ニ錮シテ、大ニ其朋友門生ヲ収テ之ヲ殺ス、九族以下、坐シ死スル者八百餘人、一人ヲ誅スル毎ニ、必ス孝孺ヲシテ

之ヲ視セシム、而シテ後孝孺ヲ出シテ之ヲ磔ス、故ノ兵部尙書鐵鉉、亦殺サル、鉉執ヘラレテ京師ニ至ル、陛見ス、廷中ニ背立シ、正言シテ屈セス、一顧セシムルモ得ヘカラス、其耳鼻ヲ割ク、竟ニ肯テ顧ミス、其肉ヲ熬テ、鉉ノ口ニ納レテ、之ヲ啖ハシム、問テ曰ク、甘ヤ否ヤ、鉉聲ヲ厲シテ曰ク、忠臣孝子ノ肉、何ソ甘カラサルコトアラシ、遂ニ之ヲ寸斷ス、死ニ至ルマテ、罵テ口ヲ絶タス、齊泰、黃子澄、景清等抗辨シテ屈セス、亦殺サル、初メ景清帝ノ出亡ヲ知ルヤ、猶ホ興復ヲ思ヒ、自ラ

伴リテ歸附ス、常ニ利劍ヲ衣衽中ニ伏ス、一日帝出テ、門ニ御ス、清奮躍シテ進ミ、將サニ駕ヲ犯カサントス、執ヘラル、清植立シテ嫚罵ス、其齒ヲ抉ス、且抉リ且罵ル、血ヲ含テ直ニ御袍ニ嚙ク、乃チ命シテ其皮ヲ剥キ、之ヲ草積シ、長安門ニ械繫ス、帝ノ駕門ヲ過ク、械スル所ノ皮、趨キ前ム數歩、駕ヲ犯スノ狀ヲナス、帝命シテ之ヲ燒ク、已ニシテ帝寢ヌ、夢ニ仗劍ヲ以テ追テ御座ヲ繞ル、覺テ曰ク、清猶ホ厲ヲ爲スカト、命シテ其族ヲ赤シ、其郷ヲ籍ス、村里爲ニ墟ス、

高煦ノ反

初メ高煦成祖ノ二子ナルヲ以テ漢王ニ封セラレ、雲南ニ國ス、高煦曰ク我レ何ノ罪アリテ萬里ノ外ニ退ケラル、後青州ニ改メラル、ニ及ンテ又曰ク我ヲ瘠土ニ置クト留テ京師ニ居リ兵器ヲ造リ陰カニ死士ヲ養ヒ亡命ヲ招キ僭シテ天子ノ車服ヲ用ル、帝大ニ怒リ之ヲ執ヘテ誅セントス、太子高熾力メテ救フ、乃チ封ヲ樂安ニ移シ、即日ニ行カシム、仁宗立テ在位僅カニ一年、太子宣宗立ツニ及ンテ高煦遂ニ反シ、奏シテ姦臣ヲ誅メンコトヲ索ム、帝諸大臣ト議シ、親征シ、蓐食

也先入寇ス

兼行シテ蹕ヲ樂安城北ニ駐メ、書ヲ以テ城中ニ諭ス、城中ノ人高煦ヲ執ヘテ獻セントスルモノ多シ、高煦狼狽シテ降ヲ請フ、帝之ヲ許シ、高煦父子及倡謀ノ者數人ヲ械シテ京師ニ送ル、趙王高燧亦叛ヲ企テタリシカ、高煦ノ執ヘラレタルヲ以テ、自ラ其護衛ヲ削テ、以テ謝ス、帝罪ヲ問ハス、後高煦京師ニアツテ殺サル、英宗ノ時瓦剌ノ也先入寇ス、至ル所陷没セサルナシ、王振、帝ニ勸メテ親征セシム、群臣留マランコトヲ請フ、王振終ニ聞カス、車駕大同ニ至ル、北

虜伴リ和ヲ請ヒ、大ニ帝ノ軍ヲ敗ル、時ニ護衛將軍樊忠、帝ノ傍ニアリテ、王振ヲ殺シテ曰ク、天下ノ爲ニ此賊ヲ誅スト、後チ帝虜ノ爲ニ擒トナル、帝ノ弟郕王位ニ即ク、之ヲ景宗トス、也先、英宗ヲ擁シテ、大同城ニ至ル、金幣ヲ求メテ、駕ヲ還ヘサシメ、トヲ約ス、都督郭登納レシテ曰ク、虜我ヲ給クナリト、袁彬頭ヲ以テ門ニ觸レ、大呼シテ諫ム、是ニ於テ、已チ得ス、城中公私ノ金銀、萬餘兩ヲ括シテ、駕ヲ贖フ、虜金ヲ獲テ、笑テ擁シテ去リ、直ニ京畿ニ逼ル、京師洶洶、都ヲ南ニ遷サントスル

ノ議アリシカ、是ヨリ先キ成祖都ヲ燕京ニ遷ス、宦官金英等ノ諫ニヨリ、固守ノ議ニ決ス、虜京師ヲ圍ム、于謙、士卒ニ率先シテ死ヲ示シ、泣テ忠義ヲ以テ三軍ニ諭ス、人人感奮、勇氣百倍ス、虜少シク沮ム、也先使ヲ遣ハシ、英宗ヲ還サシメ、トヲ議ス、是ニ於テ御史楊善ヲシテ迎ヘシム、善也先ノ營ニ至ル、虜曰ク、何ノ禮物アリテ來リ迎フルト、善曰ク、天子ヲ送リ還ヘシ、名ヲ萬世ニ垂ル、トヲ圖ル、豈財物ヲ利セシヤ、也先其言ヲ然リトシ、宴ヲ張テ餞シ、之ヲ送ル

宦官權ヲ執ル

世祖京師ニ逼ルニ當テ、宦官等、建文帝ノ嚴酷ニ堪ヘスシテ、遁レテ燕軍ニ入り、京城ノ空虚ナルヲ告ク、世祖因テ京師ヲ陷レ、宦官ヲ以テ已レニ忠ナリトシ、稍之ヲ信用ス、故ニ世祖ノ末年ニ、宦者等相謀リテ、帝ヲ弑シ、太子ヲ廢セントスルニ至ル、宣宗ニ至リ、内書堂ヲ設ケ、小内官ヲシテ、文字ヲ學ハシメシヨリ、王振ノ如キ者出テ、政權ヲ執ルニ至レリ、王振ハ多ク宦官ヲシテ、政務ニ預カラシメタリ、是ヨリ内官ノ勢、朝廷ニ盛ニシテ、憲宗ノ時ニ汪直アリ、武宗ノ時ニ劉瑾アリテ、

倭寇

皆政ヲ專ラニス、然レモ一ハ斥ケラレ、一ハ誅セラレタリ、熹宗ノ世ニ魏忠賢用ヰラレ、肆行忌ムナク、車服天子ニ擬ス、内外文武ノ諸臣、及宮嬪、内侍、忠賢ト協ハサル者ハ、皆謀テ之ヲ殺ス、毅宗立ニ及ンテ始テ忠賢及其黨ヲ誅戮ス、
 嘉靖中、世宗ノ年號、我日本後、奈良天皇ノ天文年間、倭人入寇ス、蘇浙等ノ地千餘里、其害ヲ蒙ムヲサルナシ、初メ日本ノ商賈、閩浙ノ地ニアリテ私カニ互市ス、朱統浙撫トナリ、其弊害アルヲ知リテ、之ヲ禁絶セシカバ、日本ノ商賈大ニ怒リ、相結ンテ入寇ス、後又屢倭寇

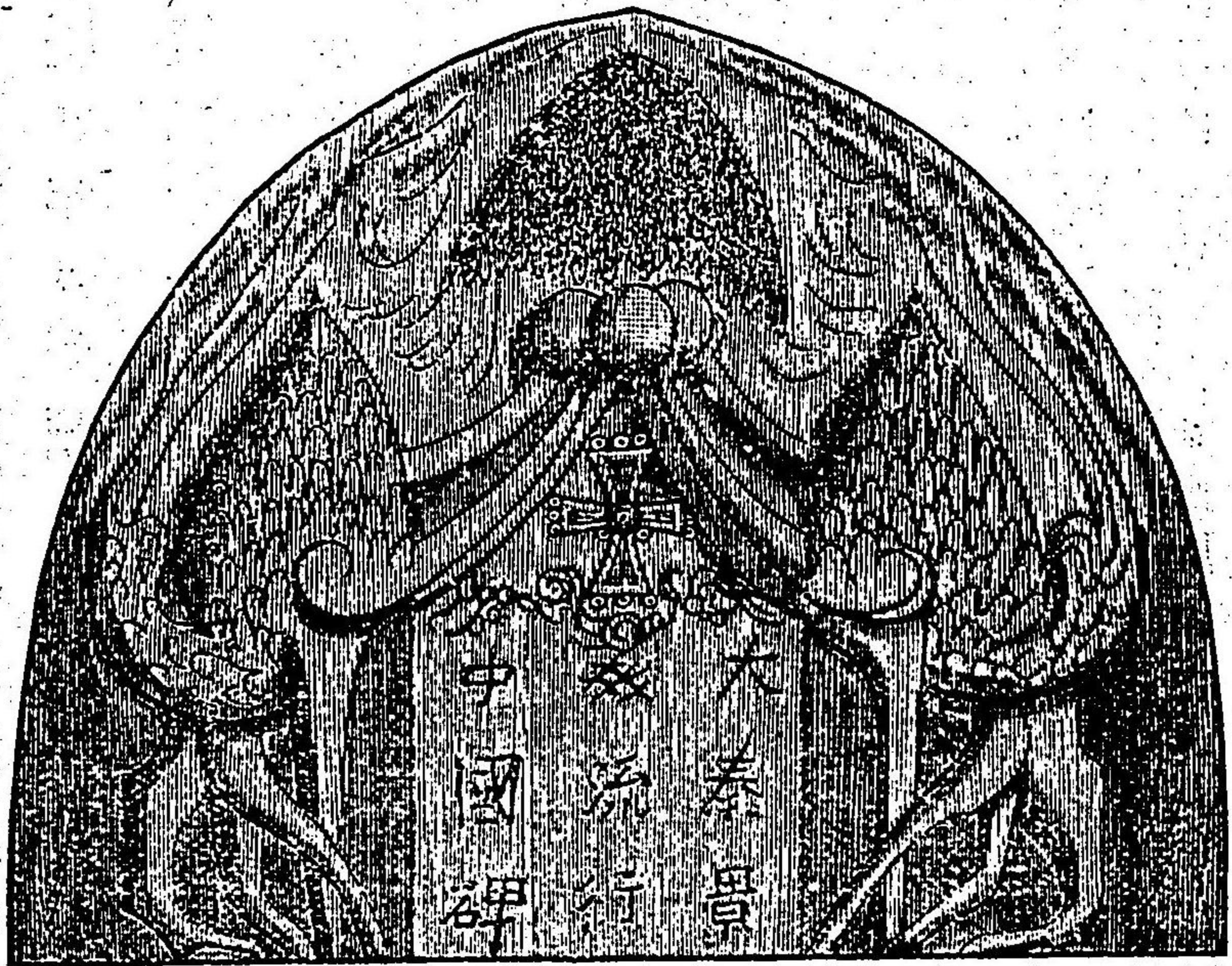
ノ爲ニ侵掠セラル、倭ノ中國ニ寇スルヤ、奸民賄
ヲ得テ、之カ爲ニ鄉導ス、故ヲ以テ、倭人據ル所ノ
營砦、皆要害ノ地ヲ得、且盡ク明兵ノ虛實ヲ知ル、
倭漢人ヲ以テ耳目トシタリ、是レ其ノ劫掠ヲ縱
ニシタル所以ナリ、

天主教

神宗ノ時、意大理亞國ノ人、利瑪竇、Matteo Ricci、京師
ニ至リ、方物ヲ獻シ、並ニ天主及天主ノ母ノ圖ヲ
貢ス、帝其遠來ヲ嘉シテ、館ヲ假シ、餐ヲ授ク、公卿
以下、其人ヲ重シ、皆交接ス、利瑪竇之ニ安シシ、遂
ニ留居シテ、去ラス、萬曆三十八年ニ卒ス、是ヨリ

先キ、利瑪竇、萬曆九年ニ廣州ノ香山澳ニ來リ、其
教漸ク行ハル、後二十一年、始テ京師ニ入り、官民
多ク信スル者アリ、信徒ノ内、徐氏、受洗シテ、保羅ト云フ
者アリ、利氏ヲ補ケテ、布教ニ盡力シ、
又「ユリッ」ト支那語ニ譯
スル爲ニ、カヲ用非タル人ナリ、利瑪竇ノ死後、獨逸ノ
「ゼシユイト」派ノ「シャール」(Schall)ト云フ人、徐氏
ノ周旋ニ由テ、萬曆帝ニ見ヘ、布教ニ盡力セリ、支那
ニ耶穌教ノ傳ハリシハ、甚ダ古ク、西曆五百五十一年、彌種ト云フ
「ユンスタン」チノ「アール」ニ携ヘ來リシ人ハ、チストリアン派
ノ傳教師ニシテ、久シク支那内地ニ留マリシヲ以テ、當時既
ニ布教シタルノト信セラル、然レ、後流行セサリシモノナ
ラン、西曆千六百二十五年、陝西ノ西安府、舊ノ長安ニテ、發見
セラレタル古碑ハ、昔時支那ニテ耶穌教ノ流行シタルヲ証
スルニ足ル者ナリ、今碑ノ一部ヲ圖シテ示ス、此碑ハ大理石
ニテ造リ、碑面ニ西教ノ大意ヲ書シ、西曆紀元六百三十五年

西安ニアル耶穌教徒石碑ノ圖



明ノ滅亡

以後碑ヲ建ツル時唐ノ德宗建中二年一月七日主日ニ至ル
 ノ西教傳道ノ概略ヲ書ス其文甚秀麗巧妙ニシテ支那ノ學
 士ト雖モ容易ニ讀ムヲ得スト其英語ニ譯シタル者ハウイ
 リヤムス氏ノ中國ト稱スル書第二卷二百七十七頁ニアリ、
 神宗ノ萬歷十一年清祖愛親覺羅氏遼左ニ起テ
 ヨリ連リニ諸部落ヲ併セ其勢強大明兵之ト戰
 ヒ屢敗ス時ニ日本豊臣秀吉其將小西行長加藤
 清正等ヲ遣ハシ朝鮮ヲ陷レ直ニ明ニ侵入スル
 ノ勢アリシヲ以テ明大兵ヲ發シテ朝鮮ヲ助ケ
 シム後關白秀吉ノ死ニ由テ日本ノ兵退去シタ
 リト雖モ國ノ南北ニ大兵ヲ發シタルヨリ國庫
 窮乏セリ帝之ヲ償ハンカ爲ニ盛ニ新稅ヲ課シ、

人民甚々困シム、是ニ於テ、人民兵器ヲ取テ政府ニ抗シ、盜賊蜂起シ、政令行ハレズ、加フルニ熹宗ノ世、魏忠賢ノ專恣アリテ、大ニ朝廷ヲ亂タシタルヲ以テ、毅宗ノ時ニ至テハ、外ニハ清兵ノ京師ニ逼ルアリ、内ニハ李自成等ノ政府ニ叛クモノアリテ、殆ト支持ス可ラス、賊中李自成、張獻忠最モ強シ、李自成遂ニ京師ニ逼リ、之ヲ陷ル、帝煤山ニ登リ、衣襟ニ書シ、詔ヲ爲テ曰ク、朕登極ヨリ十七年、逆賊京師ニ逼ル、朕薄德匪躬、上天咎ヲ干スト雖モ、然レモ皆諸臣ノ朕ヲ誤マルナリ、朕死シ

テ面目ノ祖宗ヲ地下ニ見ルナシ、賊朕カ屍ヲ分裂スルニ任ス、百姓一人ヲ傷クル勿レト、帛ヲ以テ山亭ニ縊ル、王承恩從死ス、明ノ臣吳三桂、援ヲ清ニ乞ヒ、李自成ヲ討テ、陝西ニ走ラシム、神宗ノ孫、由松、賊ヲ避ケテ、淮安ニアリ、衆推戴シテ賊ヲ討セント欲シ、立テ帝トス、後幾時モナク、清ノ豫王、多鐸ノ爲ニ獲ラル、是ニ於テ鄭芝龍等、會議シテ太祖ノ裔ナル帝聿、劍ヲ福州ニ立ツ、芝龍專ラ兵餉戰守ノ事ヲ司トル、鄭氏ノ一族、閩ニアツテ甚ク、
富ム、城ヲ厦門ニ築キ、安平鎮ト號ス、一門ノ聲勢、烜赫タリ、後テ芝龍、密ニ欸ヲ清ニ通シ、敢テ清

兵ヲ拒カス、帝贛州ニ幸セントシ、途ニ清兵ノ爲ニ擒ヘラレ、后ト共ニ市ニ斬ラル、清軍書ヲ以テ芝龍ヲ招ク、芝龍大ニ喜フ其子成功泣テ諫テ曰ク、父、子ニ忠ヲ教フ、貳ヲ以テスルヲ聞カス、且北虜何ノ信カ之アラシ、諸弟亦諫ム、芝龍聽カスシテ降ル、康熙元年芝龍其子孫ノ京ニ在ル者ト共ニ皆戮セラレ鄭成功大艦ニ乗シテ南澳ニ至リ、兵數千人ヲ得テ、神宗ノ孫帝由榔ヲ立ツ、梧州及桂林ニアリテ、屢清兵ト戦ヒ、兵勢振ハス、帝緬甸ニ走リ、鄭成功台灣ニ據リ、恢復ヲ計ル、臺灣ノ地タル北緯二十一度五十分ヨリ二十五度二十分ニ至リ、長サ凡ソ二百四十英里、廣サ平均七

十五英里アリテ支那本土ヲ隔ル一百英里海中ノ一嶋ナリ、鄭氏ノ以前ニアツテハ漢人此地ニ至ルモノナシ、日本人或荷蘭人ノ此ニ據リタルコトアリ、崇禎中、閩浙ノ大ニ旱シタル時、鄭芝龍饑民數萬ヲ徙シテ、臺灣ニ至リ、人コトニ三金一牛ヲ給シ、荒地ヲ墾セシム、芝龍ノ去リタル後、蘭人此ニ據リ、堡砦ヲ設ク、是ニ至テ成功蘭人ヲ逐ヒ、臺灣ヲ占有セリ、現今ハ人口支那人四百萬、蕃人六萬餘アリテ、獨立ノ一省ヲナシ、劉銘傳巡撫タリ、帝緬甸ニアルニ當テ、吳三桂兵ヲ率井テ薄リ撃テ、左右百餘人ヲ殺シ、帝ヲ奉シテ滇ニ還ル、後三年、帝滇城ニ崩ス、太祖ノ洪武元年ヨリ毅宗ノ崩スルニ至ルマテ、十六世二百七十六年、其後又三世二十年ニシテ明全ク亡フ、是ヨリ先キ鄭成功臺灣ニ卒シ、諸弟猶ホ永曆ヲ稱スル十九年、鄭克塽ニ至リ、清ニ降ル、按スルニ、明祖ハ諸子ヲ封シ、宦官ヲ制シ、功臣

ヲ除キ、循吏ヲ用非テ、前諸代ノ政府カ蒙ムリ
 タル諸弊害ヲ除カント力メタレモ、二世帝ハ
 位ヲ燕王ニ奪ハレ、三世ヨリ以後、宦官屢朝廷
 ナ亂タシ、縣官亦勢ヲ恃シテ人民ヲ壓シ、之ヲ
 シテ艱苦ニ陷ラシメ、續テ内訌ノ災ヲ發シタ
 リ、是ニ由テ外患京師ニ近ツクモ、之ヲ防禦ス
 ルノ力ナク、遂ニ前ニ關外ニ退ゲタル滿州人
 ノ爲ニ、再ヒ其地ヲ失ヘリ、此ノ如キハ支那歷
 代ノ通弊ニシテ、固ヨリ一定不變ノ憲法ノ如
 キモノアルナク、太祖若クハ中興ノ英主アリ

テ至良ノ制度ヲ立ツルモ、數世ヲ經サルニ、早
 ク既ニ制度弛廢シテ、言フ可ラサル禍害ヲ生
 シ終ニ亡滅ノ結果ヲ來タスニ至リシナリ、

第三十二章

明ノ制度文物等

邦制及官制

明ノ時、天下ヲ分ツテ十五省トス、南直隸ハ、南京

應天府ニ屬シ、北直隸ハ、北京順天府ニ屬ス、漢ノ

唐ノ關内道ノ如ク、天子ノ外ニ十三省、山東、山西、陝西、河

都近傍ヲ直隸ト云フナリ、南、浙江、江西、湖廣

テ、府、州、縣等トス、各省ニ按察使、布政使アリテ、之ヲ統轄シ、按察使ハ刑罰、按劾ノ事ヲ掌リ、布政使ハ省ノ政務ヲ掌トル、又府ニハ知府アリ、州ニ知州アリ、縣ニ知縣アリテ、各之ヲ統フ、府ト州トハ、地勢ニ由テ名稱ヲ異ニスルモノニシテ、必シモ州ハ府ニ屬セス、又小州ノ下ニハ縣ナクシテ、直ニ府ニ屬スルモノアリ、府ノ總數百四十九、州百二十八、縣千百五アリ、

明初メ中書省ヲ置キ、左右丞相等ノ官ヲ設ク、後ナ吏、戸、禮、兵、刑、工ノ六部ヲ置キ、又更ニ尙書、侍郎等ノ官ヲ設ケテ、之ヲ中書省ニ屬シタリシカ、其

權ヲ專ラニスルヲ虞リ、中書省ヲ廢シ、丞相ヲ罷メ、子孫ヲシテ誓テ、設立スルコトヲ許サス、若シ之ヲ奏請スル者アラハ其人ヲ凌遲ノ刑ニ處シ、全家ヲ死ニ處スルノ法ヲ定ム、六部ノ外ニ、都察院、通政司、大理寺等ノ官府アリテ、綜理甚タ周密ナリ

爵位秩祿

爵ニ三等アリ、公、侯、伯、是ナリ、又品一ヨリ九ニ至ル、凡テ九等、各品ニ正從アリ、文散官ハ、正一品榮祿太夫ヨリ、從九品登仕佐郎マテ、九等十八級アリ、武散官ハ、正一品榮祿太夫ヨリ、從六品忠武校

尉マテ、六等十二級アリ、散官ハ唯空名ニシテ、給俸ハ品ニ從テ、
 親王ハ俸萬石ヨリ、郷君儀賓二百石ニ至ル、郷君ハ宗室ノ女儀賓其他文武ノ百官、公侯、駙馬、伯等ノ爵アル者ハ、五千石ヨリ八百石ニ至ル、國初官田ノ法アリシカ、後々之ヲ廢セリ、又正一品ノ歲俸千四十四石ヨリ、從九品六十石ニ至ル、是ヲ本色俸ト、折色俸トニ分ツ、
 明初メ府州縣ヲ定メ、赤白ノ二旗ヲ郊ニ立テ、兵タルヲ願フ者ハ、赤旗ノ本ニ立テ、農タルヲ願フ

兵制

者ハ、白旗ノ本ニ立テシメ、因テ籍ニ著シテ、軍民ヲ分ツト、又錦衣等ノ十二衛ヲ設ケテ、宮禁ヲ衛ラシム、是ヲ親軍指揮使司ト云フ、又留守等ノ四十八衛アリテ、京城ヲ衛ル、五軍都督府ニ屬ス、又百戸、千戸ト稱スル兵備アリ、百戸所ノ兵員ハ百十二人アリテ、其内ニ總旗二人コカシラ、小旗十人アリ、百戸所ヲ十箇合セタルモノヲ千戸所ト云フ、千戸所ヲ五箇合セテ衛ト云フ、大率五千六百人アリ、此衛所ハ京師ヨリ州縣ニ至ルマテ皆之ヲ設ケテ備ヘトス、

學制

明ノ南北兩京ニ國子監アリ、正義、崇志、廣業、脩道、誠心、率性ノ六堂ヲ設ケテ、學規ヲ立ツ、生員四書ニ通シテ、未タ五經ニ通セサルモノハ、正義、崇志、廣業ノ三堂ニ居リ、學ハシム、一年半ヲ經テ、文理明ラカナル者ハ、脩道、誠心ノ二堂ニ升ル、又一年半ノ後テ、文理優ニシテ、經義ニ兼テ通スル者ハ、率性堂ニ升ルコトヲ得ル、生員ノ出席ヲ點シテ、七百ノ數ニ滿タサレハ、率性堂ニ升ルコトヲ許サス、

大學ノ外ニ、府、州、縣各學校アリ、在京ノ府學ハ、生

刑辟

員六十人、他ノ府學ハ四十人、教授一人、訓導一人アリテ、教授ヲ掌ル、州學ハ生員三十人、學正一人、訓導三人アリテ之ヲ掌ル、縣學生員三十人、皆民間ノ子弟ヲ撰テ之ヲ補フ、因テ其家ノ徭役二人分ヲ免ス、右生員ハ時ニ由テ増減アリ、又軍衛アル所ニハ、別ニ衛學ノ設アリ、又他ニ醫學、陰陽學等アリ、府、州、縣ノ生員ニシテ、俊秀ナル者ハ、試験ヲ受ケテ、國子監生ニ補セラレ、
國家ノ法ヲ執ルモノ、刑部、都察院、大理寺トス、是ヲ三法司ト云フ、都察院ハ前世ノ御史臺ナリ、此ノ三司ニテ總テ

天下ノ刑罰ヲ判決ス、明ハ徒刑及流刑ニモ又杖罪ヲ加フ、又五刑ノ外ニ遷徙ト云フ刑アリ、是レ郷土ヲ遷離スルコトニシテ、千里ノ外ニ謫スルヲ云フ、

明 笞刑五 十ヨリ五十ニ至ル、

ノ 杖刑五 六十ヨリ百ニ至ル、

五 徒刑五 一年ヨリ三年ニ至ル、又一年ニハ杖六十ヲ加ヘ、三年ニハ杖百ヲ加フ、

刑 流刑三 二千里ヨリ三千里ニ至ル、杖各一百ヲ附加ス、

圖 死刑二 絞及斬

租稅

明ハ唐ノ兩稅ノ法ニ從ヒ、夏ハ麥ヲ取り、秋ハ米

貨幣

ヲ取ル、是ヲ夏稅秋量ト云フ、人數ニ由テ稅ヲ課スルコトナク、田地ノ廣狹ニヨリテ年貢ヲ定ム、夏稅ハ八月ヲ過クルヲ得ス、秋稅ハ明年二月ヲ過クルヲ得ス、又天下ノ稅課司ニ令シテ、商貨三十分ノ一ヲ稅ス、凡ソ貨物ノ品ニ從テ、直ニ三十分ノ一ヲ課スルモノアリ、金、銀、鉛等ノ礦物、是ナリ、又魚、茶、酒ノ如キ類ハ、金、銀ニ換ヘテ之ヲ收ム、五穀、醋、書籍、紙ノ類ハ稅セズ、明ノ稅ハ唐宋ニ比スレハ稍寬ナリトス、
明ハ寶源、寶泉ノ二局ヲ於テ、錢ヲ鑄ル事ヲ司ト

ラシム、太祖吳王タル時、大中通寶ヲ鑄ル、大中ハ
錢ノ名ニシテ、年號ニ非ス、洪武以來、代々錢ヲ鑄
ル、皆年號ヲ以テ銘トス、小錢ヨリ當十錢マテ、五
種アリ、當十錢重サ一兩、當五錢重サ五錢、當三、當
二重サ各其數ニ準ス、小錢ハ重サ一錢ナリ、洪武
年間令ヲ出シ、生銅一斤ヲ以テ、小錢百六十ヲ造
リ、折二ハ八十、當三五四ト次第ニ此割合ナリ、
當時百六十目ヲ壹斤トス、故ニ小錢ノ重サ一錢
ニ當ルナリ、

洪武、永樂、宣德ノ舊錢ハ、每八文ヲ以テ銀一分ニ

戸口

折^カフ、八十文ヲ以テ銀一錢ニ折フ、明末ニハ五十
文ヲ以テ銀一分トシタリ、是レ偽錢多ク、其價賤
シキカ故ナリ、明ノ太祖洪武八年ニ、中書省ニ詔
シテ、大明寶鈔ヲ作ラシム、其種類六アリ、上鈔一
貫ハ銅錢千文、銀一兩ニ折フ、以下五百文、四百文、
三百文、二百文、一百文アリ、宋ノ交子、元明ノ寶鈔、皆唐
ノ飛錢ニ原因シ、券ヲ以テ
錢ニ換ヘ、使
用スルナリ、

明ノ會典ニ、洪武、弘治、萬曆、三代ノ戸口ヲ記ス、左
ノ如シ、
洪武二十六年、

戶、千六十五萬二千八百七十、

口、六千五十四萬五千八百十二、

弘治四年

戶、九百一十一萬三千四百四十六、

口、五千三百十八萬千五百五十八、

萬曆六年、

戶、千六十二萬千四百三十六、

口、六千六十九萬二千八百五十六、

清ノ圖



○卷之六

四十五

第三十三章

清

神武紀元二千三百〇四年ヨリ

太祖兵ヲ起ス

太祖名ハ弩爾哈赤、其姓ヲ愛親覺羅氏ト云フ、明ノ萬歴十一年、滿州ノ尼堪外蘭、太祖ノ父祖ヲ害シテ、圖倫城ニ據ル、太祖怒リテ、兵ヲ起シ、其城ヲ襲フテ之ニ克ツ、時ニ年二十五、僅カニ父ノ遺甲三十副、兵百人アルノミ、後外蘭ヲ斬リ、父祖ノ仇ヲ復ス、是ヨリ太祖諸部落ヲ併セ、兵食強富ナリ、年六十一ニシテ、師ヲ興シ、明ヲ伐ツ、行クニ臨テ、七大恨ヲ書シテ、天地ニ誓告シ、兵二萬ヲ以テ、撫

順城ヲ圍ミ、之ヲ陷レ、復タ清河城ニ克テ、轉戦利
ヲ得サルコトナシ、惟寧遠城ヲ攻ムルニ當テ、下
スコトヲ得ス、太祖懌ハサル數日、終ニ崩ス、年六
十八、

世祖支那ヲ
一統ス

太祖崩シテ太宗嗣キ、聰明ニシテ能ク人ヲ用井、
屢明軍ヲ敗リ、親ヲ朝鮮ヲ伐テ之ヲ降シ、國ヲ清
ト號ス、此時ニ當テ清ノ疆土日ニ廓ク、明ノ國力
漸ク屈シ能ク抗スルナシ、太祖崩シテ世祖繼テ
立テ、明ノ將吳三桂ノ援ヲ乞フニ、遇テ、賊李自成
ヲ掃蕩シ、遂ニ明ニ代リテ天下ヲ定ム、

世祖剃頭ノ
令ヲ發ス

禮部ニ諭シテ曰ク、向來剃頭ノ制、急ニ畫一セス、
姑ク自便ヲ聽ルセシ者ハ、天下ノ定マルヲ俟テ、
此事ヲ行ハント欲シテナリ、朕已ニ之ヲ籌ル、熟
セリ、君ハ猶父ノ如ク、民ハ猶子ノ如シ、父子一體
豈違異ス可シヤ、若シ一二歸セサレハ、終ニ二心
ニ屬ス、異國ノ人タルニ幾カ、ラスヤ、此事朕カ
言ヲ俟タサルナリ、想フニ臣民亦之ヲ明カニス、
今ヨリ布告ノ後、京城内外旬日ヲ限リ、直隸各省
ノ地方ハ部文到ルノ日ヨリ亦旬日ヲ限リ、盡ク
剃髮ヲ行ヘ、遵奉スル者ハ我國ノ民タリ、遲疑ス

ル者ハ則テ命ニ逆フノ寇ニ同シ、必ス重罪ヲ加ヘン、若シ規避シテ髮ヲ惜ミ、巧辭爭辨スルトモ、決シテ輕貸セス、該地方ノ文武百官、各究察シテ、剃ヲ驗セヨ、其衣帽裝束ハ、便宜更易スルヲ許スモ、悉ク滿州ノ俗ニ從テ異ナル勿レト、此ノ嚴令ハ、明人ノ頗ル好マサル所ニシテ、寧ロ頭ヲ失フモ、頭髮ヲ剃ルニ恐ヒサル者アリテ、薙髮ノ亂起リ、其勢一時猖獗ナリシカ、漸クニシテ、平定シ其令全國ニ行ハル、只福建ノ人民ハ、今日ニ至ルマテ一種ノ頭巾ヲ載テ、剃髮ヲ隱蔽スルノ風アリ、

世祖ノ治績

世祖明ニ代リテ、支那ヲ一統シ、明ノ餘類ヲ平ケ、意ヲ政務ニ致シ、民心ヲ得テ海内ヲ綏ス、先ツ滿漢官民ノ和睦ヲ計リテ、互ニ婚姻スルヲ許シ、又心ヲ學事ニ留メ、大學ニ幸シテ先聖孔子ヲ釋奠シ、文華殿ヲ作りテ經筵日講ノ地トス、帝ハ特ニ内官ヲ制シ、鐵牌ヲ諸衙門ニ立ツ、諭シテ曰ク、中官ノ設、古ヨリ廢セスト、雖モ、然レモ、任使宜ヲ失ハ、遂ニ禍亂ヲ貽ス、近ユロ明朝ノ王振、汪直、劉瑾、魏忠賢等ノ如キ、專ラ威權ヲ擅ニシ、政ニ預カリ、無辜ヲ枉殺シ、其鎮ニ出ルニ及ンテ毒ヲ邊境

ニ流ス、甚シキハ不軌ヲ謀リ、忠良ヲ害シ、國事日ニ非ニシテ、覆敗相尋ク、鑒戒トナスヘシ、朕今、内官衙門及員數職掌ヲ裁定ス、法制甚タ明カナリ、後法ヲ犯ス、者アラハ、即チ陵遲ノ刑ニ處セント、帝在位十八年、壽二十四、

康熙帝ノ治世

世祖ノ太子立暉、位ニ即ク、之ヲ聖祖トス、康熙帝是ナリ、帝志量恢宏、十四歳ニ至テ自ラ政ヲ行ヒ、才智俊邁、能ク政務ヲ理ス、佛王路易十四世ハ、西歴千六百六十一年即位シタリ帝ノ即位ハ其翌年ニシテ、後五十餘年間、此二帝王東西ニ相並ンテ能ク國ヲ治メテ、威ヲ外邦ニ耀カセリ、帝ノ時吳三桂反シ、初メ吳三桂、援チ清ニ乞ヒ、李自成ヲ討テヨリ、清ノ爲ニ力ヲ盡シ、功ヲ以テ平西王ニ封セラ

ル、帝各藩ノ強大ナルヲ憂ヒ、兵ヲ撤セシメントス、三桂自ラ以爲ク我功大ナリ、朝廷我藩ヲ奪ハスト、先ツ朝旨ヲ探ラシカ爲ニ、疏シテ藩ヲ撤セント請フ、朝廷之ヲ許ス、令下ルニ及ンテ愕然タリ、而シテ兵ヲ舉クルノ名ナシ、明ノ後チ立ント欲スレハ、緬甸ノ役自ラ解スヘキナシ、又遷延シテ謀ノ泄レシコトヲ恐レテ、遂ニ反ス、遠近之ニ應スル者多ク、明ノ制ニ復シ、服チ更ヘ、髮ヲ蓄ヘ、帝號ヲ稱スルニ至リシ、諸賊亦之カ、三桂死シテ、兵勢日ニ蹙マリ、餘黨亦次テ平ク、諸賊亦之ニ應シタリシカ、卒ニ平クルコトヲ得タリ、帝在位ノ間、西藏ヲ親征シ、又兵ヲ西域ニ出シテ、大ニ其版圖ヲ擴メタリ、支那ノ法律、制度、及風俗等ノ鞏固ヲ致シテ、今日ニ至ルマテ變セサル所以ハ、此帝ノ在位久シカリシヲ以テナリ、帝ハ深ク文學ヲ好ミ、賢良ノ吏ヲ用井、以テ民福ヲ増進スル

コトニ注意セリ、又帝ハ外國ニ對シテ偏頗ノ心
ナク、自由ニ貿易スルヲ許シタリ、故ニ外國ノ宣
教師等、帝ヲ賞讚シテ英王、アルフレッド、佛王ル
井九世ニ比シタリ、

緬甸ヲ征ス

乾隆帝、緬甸ヲ征シテ其地ヲ得ント欲シ、大學士
楊應琚ヲシテ行テ之ヲ討タシム、應琚、永昌ニ至
リ、先ツ緬ニ檄シテ言フ、天兵數十萬境上ニ陣ス、
降ヲサレハ則テ進討セント、緬人之ヲ聞キ、大ニ
兵ヲ發シテ、清軍ヲ撃テ之ヲ敗ル、將軍明端、又大
舉シテ緬ヲ征シ、柵ヲ破リ、勝ニ乘シテ進ミ、深ク

入ルコト二千餘里、糧盡キ道險シク、敵兵逼リ撃
ツ、援兵至ラス、將士奮戰シ、一以テ百ニ當ル、將軍
觀音保數矢ヲ發シ、連リニ敵ヲ殪ス、尙ホ一矢ヲ
餘ス、矢ヲ注シ復タ射ント欲シ、既ニシテ手ヲ停
メ、忽テ馬ニ策シテ去リ、其鏃ヲ以テ喉ヲ刺シテ
死ス、明端亦數創ヲ負ヒ、蠻手ニ落ツルヲ慮リ、從
容トシテ馬ヨリ下リ、手自ラ辮髮ヲ斬リ、家丁ニ
授ケ歸リ報セシム、而シテ後樹下ニ縊ル、帝復タ
大軍ヲ發シ、傳恆ヲシテ緬甸ヲ征セシメ、大ニ勝
ツ、緬酋書ヲ致シテ款ヲ納レ、方物ヲ獻シ、入貢ヲ

教匪ノ亂

請フ、遂ニ軍ヲ還ヘス、
 山東ノ奸民、王倫、邪教ヲ以テ無賴ノ徒ヲ集メ、城
 ナ襲ヒ、吏ヲ戕フ、時ニ承平日久シク、官民皆兵ニ
 習ハス、賊刼掠ヲ縱ニス、總兵惟一、亦賊ヲ撃テ敗
 ス、乾隆帝惟一ヲ斬リ以テ徇フ、援兵漸ク集リ、城
 ナ圍ムコト數重、賊樓ニ登リ、火ヲ縱テ死ス、是ヨ
 リ後、回教ノ徒、馬明心、朗誦ノ法ヲ傳ヘ、新教ト號
 シ、默誦ノ舊教ト相仇トシ、舊教ノ徒數百人ヲ殺
 ス、官兵之ヲ討テ、賊首馬明心ヲ捕ヘテ之ヲ誅ス、
 後又白蓮教徒、劉之協等教ヲ唱ヘ、徒ニ授ケ、川陝

鴉片ノ亂

湖北ニ徧チク、日久フシテ其黨益衆シ、遂ニ不軌
 ナ謀リ、同教徒王氏ノ子、發生ト云フ者ヲ以テ、詭
 テ明裔朱姓トシ、以テ流俗ヲ煽動ス、後遂ニ其黨
 誅ニ伏ス、發生幼童ナルヲ以テ死ヲ免カル、是ヨ
 リ先キ、乾隆帝屢、大軍ヲ起シテ緬甸ヲ征シ、國庫
 甚タ窮乏シタルヲ以テ、私鹽私鑄ヲ嚴禁シ、且重
 稅ヲ課シタルヨリ、人民官ヲ讎トシ亂ヲ思フ、奸
 民機ニ乘シテ煽惑シ、屢亂ヲ起セリ、
 道光帝位ニ即クニ及ンテ、支那國民一般ニ鴉片
 喫烟ノ弊風甚タ盛ニシテ、皇子亦鴉片烟ノ毒ニ

罹リテ死セリ、故ニ政府ニ於テモ鴉片貿易ヲ禁
 スルノ議ニ決セリ、然レモ英國商人及他ノ外國
 人等ハ鴉片貿易ノ爲メ、支那人ニ如何ナル害毒
 アルモ、決シテ此貿易ヲ廢ス可ラスト決定セル
 ナリテ、支那政府モ頗ル其處理ニ苦メリ、然レモ
 政府ハ此貿易壓制ノ爲ニ力ヲ盡シ、支那商ノ鴉
 片ヲ輸入スル者數人ヲ死刑ニ處シ、又鴉片ヲ使
 用スル者ニハ非常ナル罰金ヲ課シ、又ハ死刑ヲ
 以テ之ヲ恐嚇シタリシカ、皆無効ニ屬シタリ、時
 ニ林則徐廣東ノ總督トナリ、鴉片ヲ嚴禁シ、貿易

ヲ罷メシメ、且英商ニ命シテ、其蓄フル處ノ鴉片
 ナ悉ク支那官吏ニ交附セシメントシ、嚴ニ兵備
 ナ張テ之ニ臨ム、英商懼レテ千餘函ヲ呈ス、則徐
 未タ其數ヲ盡サ、ルヲ責ム、英商抗辨シテ服セ
 ス、則徐内地ノ民ニ命シテ、之ニ飲食ヲ輸送スル
 ナ絶ツ、英商窮窘シテ終ニ悉ク之ヲ致ス、其數總
 テ二萬餘函、此價殆ト一千一百万弗ナリ、此鴉片
 ハ悉ク消燼セラレ十六人ノ外商ハ廣東ヲ追放
 セラレ、自餘ノ者ハ、以後決シテ此不正ノ貿易ニ
 従事セストノ書面ヲ要求セラレタリ、後諸外國

トノ貿易ヲ許シタレド、惟英人ヲ拒絶セリ、是ニ於テ英人戰艦ヲ以テ廣東ニ入り、請テ曰ク、互市ヲ復セハ則チ已ム、否ラサレハ戰アルノミト、則徐應セス、英人官船ニ寇シテ去ル、西曆千八百四十一年七月四日、英將エリオット(Elliot)軍艦五艘、汽船三艘、運漕船二十一艘ヨリ成ル所ノ一大艦隊ヲ以テ來リ、舟山ヲ取リ、浙東ノ郡縣ヲ略ス、朝廷、欽差大臣伊里布等ニ命シテ和ヲ議セシメ、則徐ノ職ヲ褫フ、然ルニ伊里布等ノ處置亦宜ヲ失シタルヲ以テ、再ヒ林則徐ヲ任用シ、伊里布等

ノ職ヲ罷ム、時ニ英國印度ノ鎮將、璞鼎查(Sir Henry Pottinger)兵三萬餘ヲ率ヰテ來リ、援ク、斯ニ於テ英軍益振ヒ、遂ニ南京ニ逼ル、帝防ク可ラサルヲ知り、復タ伊里布等ヲシテ和ヲ議セシム、其條約ノ箇條ハ左ノ如シ、曰ク、自今兩國ノ間ニ平和ヲ保持スル事、曰ク、廣東、廈門、福州、寧波及上海ノ五港ヲ開テ英國ノ貿易ヲ許シ、且明瞭ナル稅則ヲ設クル事、曰ク、香港ヲ英國ニ割キ與フル事、曰ク、鴉片ノ損害及ヒ軍費ノ辨償トシテ、二千百萬弗ヲ西曆千八百四十六年一月一日前ニ拂フヘキ

事曰ク兩國互ニ囚虜ヲ放免シ、且支那人ニシテ
 英人ニ與シタル者ヲ赦免スル事、曰ク支那ヨリ
 前ニ定メタル金額ヲ拂フニ隨テ、英人ノ略奪シ
 タル浙東等ノ土地ヲ返還スル事等ナリ、抑モ此
 戰爭タル、支那ニ於テハ國民ヲ荼毒スル鴉片ノ
 害ヲ除カントシタルヨリ起リシモノニシテ、固
 ヨリ正理ト云フヘシ、而シテ戰ヲ交ルニ至テ、泰
 西文明ノ利器ニ敵スヘキニ非ス、連リニ敗レテ
 此國辱ヲ取ルニ至レリ、然レモ此戰爭ニ由テ支
 那從來自負尊大ノ陋習ヲ破リ、諸外國ヲ看ルコ

長髮賊

ト夷狄ノ如キノ迷夢ヲ覺シタルノ利ヲ得タリ、
 道光三十年、廣東ノ逆民、楊秀清、馮雲山等亂ヲ桂
 平縣ノ金田ニ起ス、秀全ハ廣東ノ人、年四十、膽略
 アリ、略字ヲ識ル、天主教ヲ奉シ、自ラ天父ノ第二
 子トシ、耶穌ヲ天兄ト稱セリ、曰兵士教ノ爲メニ
 戰死スル者ハ升天シテ福ヲ受クルト嘗テ、秀全
 病ニ極メテ危ウシ、癒ユルニ及ンテ詭テ曰ク、病
 死七日ニシテ蘇ル、能ク未來ノ事ヲ知ルト、總テ
 會ニ入ル者ヲ兄弟姊妹ト稱シ、偽號ヲ建テ太平
 天國ト號シ、自ラ天王ト云フ、此賊ノ猖獗ヲ極メ

タル際、道光帝崩シテ、咸豐帝位ニ即ク、帝ノ時、長髮賊ハ南部ノ諸州ヲ掠メ、遂ニ南京ニ迫リ之ヲ陷ル、朝廷防クニ術ナク、英將ゴルドンヲ聘シテ賊ヲ討滅スルノ任ヲ囑シ、總督李鴻章、曾國藩ヲシテ共ニ賊ヲ討タシム、是ヨリ四方ニ轉戦シ、互ニ勝敗アリシカ、同治帝ノ時ニ至リテ漸ク平定セリ、此反亂ノ爲ニ、支那ノ内地殆ト二千英里ノ間、都邑村落頽廢ニ歸シ、人命ヲ損スルコト二千萬ノ多キニ及フト云フ、此亂ハ西曆千八百五十年ニ起リ、六十四年ニ終ル、始メ洪秀全ハ耶蘇教

徒ナリト稱シ、支那政府ノ暴虐壓制ナルヲ唱ヘテ之ヲ改革シ、更ラニ善良ナル政府ヲ組織セント宣言シタルヲ以テ、居留ノ外國人モ頗ル之ニ左袒シタリシカ、逆徒漸ク進ミ、上海ノ近傍ニ至リ、擅ニ人民ヲ劫カシ、貨財ヲ掠ムル等ノ事アルヲ見テ、始テ其僞善者ナルヲ認メテ、外國人等モ政府ヲ助ケテ之ヲ攻撃シ終ニ能ク鎮定スルヲ得タルナリ、

同治六年、廣東ノ人、英ノ商船ヲ掠奪ス、英官其暴舉ヲ訴フ、官吏輕視シテ理セス、英將怒テ兵ヲ發

英佛ノ軍北
京ヲ圍ム

シ、廣東ノ諸砦ヲ撃ツ、清軍之ヲ拒ク、是ヨリ連年
 兵ヲ構フ、後々英佛二國同盟シテ廣東ニ寇シ、北
 河ニ入り、諸砦ヲ破リテ直ニ天津ニ至ル、帝北京
 ニ侵入セラレンコトヲ懼レ、天津ニ至テ和ヲ講
 セシム、二國請フテ曰ク、天津及諸港ノ互市ヲ許
 シ、耶蘇教ヲ中國ニ弘メ、官其教ヲ奉スル者ヲ保
 護シ、公使ヲ北京ニ在留スルヲ許スヘシト、明年
 英佛二國ノ使臣天津ニ至リ、前年ノ請ヲ述フ、其
 船北河ニ入ルニ及ンテ、清兵不意ニ礮撃シ、數十
 人ヲ斃ス、使臣僅カニ身ヲ以テ免カル、是年英佛

ノ兵二萬人進テ北京ニ迫ル、清兵支フル能ハス、
 相率井テ奔潰ス、帝大ニ驚キ后妃及諸王ヲ率井
 テ北ニ走リ、皇弟恭親王ヲ留テ京師ヲ守ラシム、
 時ニ英佛ノ兵已ニ京師ニ迫ル、恭親王急ニ使ヲ
 馳セテ和ヲ議ス、英將俘ヲ縱テ盟ヲ修ムルノ事
 ヲ請ヒ、期スルニ三日ヲ以テス、曰ク若シ期ヲ過
 キ報ヲ得スンハ直ニ北京ヲ衝カント、恭親王ノ
 報、期ヲ逾エテ至ラス、二國ノ兵進テ北京ニ入リ、
 火ヲ縱テ夏臺及圓明園ヲ燬ク、恭親王遂ニ其ノ
 請フ所ヲ聽ルシ、二國ニ與フルニ各償金千二百

萬兩ヲ以テシ、又牛莊、登州、臺灣等ノ七互市場ヲ
開キ、和議成ル、

好ヲ日本ニ
通ス

同治八年、日本柳原前光、國書ヲ致ス、其略ニ曰ク、
大日本國從三位外務卿清原宣嘉等、書ヲ大清國
總理外國事務大憲臺下ニ致ス、我カ國往昔ヨリ
貴國ト往來シ、交誼殊ニ深シ、方今西洋諸國ト約
ヲ定メテ貿易スレモ、未タ曾テ貴國ト約ヲ結ハ
ス、竊カニ思フ、兩國友誼餘リアリテ、名分定マラ
サルノ嫌ヲ免カレス、而シテ盟約ノ事終ニ久シ
ク曠シクスヘカラス、因テ今柳原前光等ヲシテ

日本辦理大
臣大久保利
通來ル

貴國ニ往キ、通信通商ノ事ヲ定メシム云々、十一
年日本ノ領事官來リテ、通交ノ事務ヲ總フ、領事
官ノ本廳福州ニアル者ハ、廈門、臺灣、淡水ノ事務
ヲ兼管ス、上海ニアル者ハ、鎮江、漢江、九江、寧波ヲ
兼管シ、香港ニアル者ハ、廣州、仙頭、瓊州ヲ兼管ス、
同治十三年、日本辦理大臣大久保利通來リ、攝政
恭親王等ニ會シ、盟約ヲ成シ、駐臺ノ師ヲ撤ス、是
ヨリ先キ、我日本ノ備中ノ民、及琉球人、台灣生蕃
ノ地ニ漂到シ、蕃人ノ爲ニ殘害セララル、是ニ於テ
日本問罪ノ師ヲ起シ、陸軍中將西郷從道ヲ以テ、

蕃地ノ事務總督ニ任シ、兵艦五隻ヲ率ヰテ台灣ニ到ラシム、一戰ニシテ牡丹社酋長ヲ斬リ、武威大ニ振フ、生蕃十八社ノ酋長降ル者相踵ク、從道龜山ニ營シ、專ラ剿撫ヲ務ム、清國、生蕃ノ境、其屬地ニ聯ナルヲ以テ、我日本ノ兵ヲ撤センコトヲ求ム、日本肯セス、兩國ノ釁將ニ開ケントス、日本ハ參議兼內務卿大久保利通ヲ以テ、全權辦理大臣ニ任シ、清國ニ使シ、兩國ノ紛紜ヲ解カシム、利通上海ニ航シ、轉シテ北京ニ入り、清國政府ト生蕃ノ所屬ヲ論ス、數日ニシテ決セス、利通議ノ協

ハサルヲ見テ、憤然將ニ去ラントス、時ニ英國公使北京ニアルモノ、其間ニ入りテ調停シ、周旋甚々至レリ、和議終ニ成ル、恭親王、軍機大臣寶鋆等相共ニ會議シ、兩國和好ノ條款ヲ建テ、鈐印ヲ連署シテ交換ス、銀貨五十萬兩ヲ日本ニ納レ、台灣ノ兵ヲ撤セシム、時ニ同治十三年十一月十二日日本ノ明治七年十二月二十日ナリ、從道等兵ヲ撤シ去ル、

第三十四章

明清ノ人物畧傳

徐達常遇春

徐達、常遇春、太祖ニ從テ、四方ヲ征略ス。太祖ノ吳王ノ位ニ即クヤ、徐達右相國トナリ、常遇春平章政事トナル。帝大號ヲ正スニ及ンテ、徐達ヲ信國公トシ、常遇春ヲ鄂國公トシ、二人ニ命シテ、兵二十五萬ヲ率ヰテ、北伐シ、中原ヲ定メシム。汴梁ヲ取り、潼關ヲ拔キ、遂ニ山西ヲ定ム。太祖ノ中原ヲ定ムル、二人尤モ力アリ。洪武二年、常遇春軍中ニ卒ス。帝痛悼シテ曰ク、平定ノ功、常遇春十二八九

劉基

ニ居ルト、二子ヲ封シテ公トシ、長女ヲ以テ太子ノ妃トス。既ニシテ徐達、陝西ヲ平ク、帝ノ功臣廟ヲ建ル。徐達、常遇春ヲ以テ首トス。洪武十八年、徐達卒ス。帝追悼シ、親カラ文ヲ爲リテ之ヲ祭リ、中山王ニ追封シ、長子某ヲシテ、魏王公ニ襲封ス。劉基ハ青田ノ人、幼ヨリ聰明、天文、兵法、性理ノ諸書、目ヲ過クレハ其要ヲ洞識ス。元ノ至元ノ初、進士ニ擧ケラレ、説行ハレス。紹興ニ安置ス。太祖使ヲ遣リ、聘スルニ及ンテ、金陵ニ趨キ、十八策ヲ陳ス。帝以テ帷幄ニ侍セシム。帝ノ陳友諒ト鏖戦ス。

ルヤ、基驚テ曰ク、難星過ク、速ニ舟ヲ更ヘヨト、帝急ニ之ヲ更フ、舊舟已ニ敵砲ノ碎ク所トナル、撃テ友諒ヲ殺ス、後大史令トナリ、律令ヲ定ム、洪武八年卒ス、爵誠意伯トナル、基帝ヲ輔ケ、中原ヲ平定ス、帝嘗テ子房ヲ以テ之ニ譬フ、賜誥ニ曰ク、學ハ帝師タリ、才ハ本王佐、渡江業士無雙、開國文臣第一、

王守仁

王守仁ハ、浙江餘姚ノ人、陽明山人ト號ス、天資英異、平生講學ヲ以テ自カラ任ス、專ラ良智良能ヲ致スヲ以テ主トス、武宗ノ朝、劉瑾ノ政ヲ亂スヤ、

上疏シテ之ヲ諫ム、瑾詔ヲ矯メ、之ヲ杖ス、斃レテ復蘇ル、貴州ニ謫セラレ、瑾之ヲ死ニ置カントス、人ヲシテ途ニ伺ハシム、守仁免カレサルヲ慮リ、夜ル伴テ江ニ投スルマテシテ、冠履ヲ水上ニ浮ヘ、遂ニ武夷山中ニ入ル、寧王宸濠ノ叛、守仁勤王ノ兵ヲ率井、撃テ之ヲ平ラケ、後功ヲ以テ新建伯トナル、兵部尙書ニ任ス、已ニシテ又田州ノ亂ヲ平ラケ、世宗ノ嘉靖八年卒ス、守仁才文武ヲ兼テ、尤心ヲ經學ニ用井テ、天地萬物一體ノ理ニ悟ル、著ス所傳習錄アリ、

嵩嚴

世宗日ニ齋醮ヲ事トシ、經年朝ヲ見ス、嚴嵩禮部
 尙書トナリ、寵任セラレテ事ヲ用ヰル、賄賂公行、
 邪佞日ニ親ム、百官建白スル所、皆先ツ嵩ニ白シ、
 然ル後上聞ス、苞苴其門ニ輻輳ス、晉銑カ塞ヲ出
 テ虜ヲ破ルヤ、嵩其妄リニ邊釁ヲ開クヲ論シ、之
 ナ斬ル、沈鍊、嵩カ私門ヲ營ミ、威福ヲ專ニスルノ
 十大罪ヲ論ス、詔シテ之ヲ廷杖シテ、保安ニ謫シ、
 後之ヲ殺ス、揚繼盛、又嵩カ十罪、五奸ヲ論ス、帝怒
 リ之ヲ廷杖ス、血肉岔起ス、卒ニ之ヲ殺ス、後帝漸
 ク嵩ヲ疑フ、鄒應龍、嵩父子ノ不法ヲ極論ス、帝心

李自成

動キ、嵩ニ命シ致仕シ、傳ニ乘シ去ラシメ、其子世
 蕃ヲ獄ニ下ス、後々誅ニ伏ス、嵩故舊ニ寄食シ、以
 テ死ス、
 李自成ハ、米脂ノ人性狡黠善ク走リ、騎射ヲ能ク
 ス、崇禎元年延安盜起ルニ及ンテ、往テ之ニ投ス、
 官軍來リ討ス、自成走テ山澤ニ匿ル、已ニシテ復
 タ出ツ、旬日ノ間、衆萬餘ニ至ル、衆高迎祥ヲ推テ
 首トシ、闖王ト稱シ、自成ヲ闖將トス、高迎祥獲ラ
 レテ磔死スルニ及ンテ、自成闖王ト爲ル、洛陽ヲ
 攻メテ之ヲ陷レ、福王常洵ヲ殺シ、又南陽ヲ陷レ、

唐王聿鎮ヲ殺ス、自成初メ遠圖ナシ、河南、荆、襄ヲ
舉クルニ及ンテ衆百萬アリ、始テ天下ヲ制スル
ノ志アリ、遂ニ王ヲ西安ニ稱シ、國號ヲ建テ順ト
曰フ、進テ京師ヲ陷ル、毅宗自經ス、范景文、倪元璐
等節ニ死スル者數十人、自成帝位ニ武英殿ニ即
ク、已ニシテ吳三桂ノ誘キ破ル所トナル、走テ黔
陽ニ在リ、食ニ乏シ、自カ出テ抄掠ス、村民ノ殺ス、
所トナル、

吳三桂

闖賊ノ近畿ニ迫ルヤ、吳三桂ヲ平西伯ニ封シ、入
テ衛ラシム、三桂兵ヲ率井入テ援ク、京城陷リ帝

后難ニ殉スト聞キ、縞素哀ヲ發シ、援ヲ清ニ乞ヒ、
直ニ北京ヲ擣ク、李自成大ニ驚キ、三桂ノ父襄ヲ
執ヘ、書ヲ作テ三桂ヲ招ク、三桂佯テ之ニ應シ、直
ニ守關ノ賊ヲ殺シ、京師ニ逼ル、自成大ニ怒リ、盡
ク、三桂カ家口ヲ殺シ、襄カ首ヲ城上ニ懸ク、三桂
悲憤清ニ降り、攻撃尤モ力ム、自成破レ、陝西ニ走
ル、清三桂カ爵ヲ平西王ニ晋ム、是ヨリ清ノ爲メ
ニ連戦シ、叛亂ヲ平ラケ、明帝由榔ヲ緬甸ニ撃ツ、
緬酋帝ヲ執ヘ、三桂ニ送ル、是ニ於テ三桂權勢愈
重シ、已ニシテ又々清ニ叛キ、帝ト稱シ、元ヲ建テ、

鄭成功

衡州ニ都ス、康熙十七年死ス、孫世璠嗣ク、官軍滇城ヲ復スルニ及ンテ、世璠自殺ス、鄭成功初ノ名ハ森、字ハ大木、平國公芝龍ノ子ナリ、芝龍流落シテ日本肥前ニ客タリ、平戸ノ士田川某ノ女ヲ娶リ、天啓四年成功ヲ生ム、生レテ七歳、父ニ從テ歸ル、年十五ニシテ弟子員ニ補セラ、隆武帝唐見テ之ヲ偉ナリトシ、其背ヲ撫シテ曰ク、恨ムラクハ一女ノ汝ニ配スルナキヲ、姓ヲ朱ト賜ヒ、今ノ名ニ改メ、中軍都督ニ拜セラ、ル、是ヨリ中外國姓爺ト稱ス、既ニシテ芝龍心ヲ清ニ

通ス、一日成功帝ノ愁悶スルヲ見、奏シテ曰ク、陛下鬱々樂マス、臣カ父ノ故ヲ以テニ非ラスヤ、臣厚恩ヲ受ク、義父ヲ顧ルニ暇アラス、死ヲ以テ陛下ヲ護ラシ、清軍福州ニ入ルニ及ンテ、芝龍出テ降ル、清兵安海ニ至リ淫掠ヲ肆ニス、成功カ母亦辱ヲ蒙ル、城樓ニ登テ自殺シ自カラ河水ニ投ス、成功痛恨其母ノ腹ヲ剖キ腸ヲ出タシ、滌テ而シテ之ヲ歛ス、成功父叛キ、母死スルニ及ンテ、慷慨悲憤、義兵ヲ起スヲ謀リ、着ル所ノ儒服ヲ焚キ、去テ漳、泉、潮、惠ノ諸州ヲ取ル、清主高爵ヲ以テ之ヲ招ク、成功報セス、厦門ヲ以テ根據トシ、軍勢大ニ振フ、忠孝伯ヨリ延平郡王トナル、大舉シテ、

金陵ヲ攻ム、成ラス、然レトモ成功カ世ヲ竟ルマ
 テ、清軍厦門ヲ窺ハス、永曆十五年、親カラ兵三千
 ナ率井、臺灣ニ入り、荷蘭ノ戍兵ヲ追ヒ、之ヲ取ル、
 臺灣ヲ改メテ安平鎮トシ、又東寧ト改ム、土酋皆
 約束ヲ受ク、法律ヲ制シ、學校ヲ興ス、吳三桂永曆
 帝ヲ害スト聞キ、憤惋シテ疾ヲ成シ卒ス、年三十
 九、子經、孫克塽相繼テ明ノ正朔ヲ奉シ、東寧ヲ鎮
 スル數十年、成功義ヲ起セシヨリ、克塽清ニ降ルマテ、凡
 テ三十七年、清克塽ヲ封シテ漢軍公トス、
 范文程ハ、瀋陽ノ人、宋ノ范仲淹ノ後ナリ、天命三
 年、策ヲ杖テ、清ノ太祖ニ謁ス、流賊李自成カ、明ノ

范文程

北京ヲ陷レ、吳三桂來テ師ヲ乞フヤ、建議シ、太祖
 ナ勸メ、之ヲ討セシム、文程亦疾ヲ扶ケ、征ニ隨フ、
 紀律ヲ申嚴シ、秋毫モ犯スナシ、進テ賊兵二十萬
 ナ破ル、世祖ノ鼎ヲ定ムル、上疏シテ盡ク明季ノ
 弊政ヲ除ク、嘗テ晝夜闕下ニアリ、事巨細トナク、
 機ニ應シ立トコロニ辨ス、開國ノ規制多クハ文
 程ノ定ムル所ナリ、議政大臣ニ任セラレ、一等子
 ニ至リ、小保ニ晋ム、病ヲ以テ休ヲ乞フ、詔シテ晝
 工ヲ遣リ、第ニ就キ、其像ヲ圖シ、內庫ニ藏ス、其卒
 スルニ及ンテ、聖祖親カラ碑文ヲ製シ、墓上ニ勒

鄂爾泰

ス、鄂爾泰姓ハ、西林覺羅氏、滿洲ノ人、雍正三年雲貴總督ニ署セララル、貴州狃苗、險ヲ負ミ肆逆ナリ、之ヲ鎮撫スル、久フシテ成ラス、鄂爾泰奏シテ曰ク、百年ノ無事ヲ欲セハ、土ヲ改メ、流ニ歸スルニ非レハ、不可ナリ、盈廷色ヲ失フ、太宗曰ク、此レ奇臣、天我レニ賜フナリ、三省總督ヲ加ヘ、賊ヲ討セシム、賊悉ク擒ニ就ク、帝大ニ悦フ、公人ヲ知リ善ク任シ、賞罰明肅、麾下身ヲ顯貴ニ致ス者亦多シ、世宗晩年、公ヲ召シ、禁中ニ宿セシメ、月ヲ逾テ出テ

林則徐

ス、人皆之ヲ怪シム、世宗俄ニ升遐スルニ及ンテ、顧命ヲ受クル者、公一人ノミ、遺詔ヲ奉シ、禁城ニ入ル、深夜馬ナシ、羸ニ騎テ奔リ、高宗ヲ擁立ス、禁中ニ宿スル七晝夜、始テ出ツ、左袴紅濕、人驚テ之ヲ見レハ、髀血涔々下ル、方ニ知ル、倉卒ノ際、羸ノ傷ル所トナルヲ、公竟ニ知ラサルナリ、軍機大臣、大保ヲ以テ卒ス、林則徐生レテ敏警、身ノ長ケ六尺ニ盈タス、英光四射、聲洪鐘ノ如シ、東河總督ニ擢テラレ、累遷シテ湖廣總督トナリ、遂ニ粵東ノ命アリ、是ニ於テ

カ阿片ノ亂アリ、公大ニ爲ス所アラント欲ス、遂ニ忌ム者ノ中傷スル所トナリ、其位ヲ安ンセス、天下是ヨリ多事ナリ、洪秀全ノ亂、公ニ命シ欽差大臣トシ、馳セテ廣西ニ赴キ、督勦セシム、公嘗テ粵ヲ督シ、威惠並ヒ著ハル、粵民手ヲ額ニシテ相慶ス、賊黨散スル大半、洪秀全惧レ、遁レテ海ニ入ルヲ謀ル、公進テ潮洲ニ次シ、疾テ薨ス、是ヨリ賊勢大ニ張り、海内ノ全力ヲ竭シテ、厘ニ之ニ克ヲ得ル、當時方ニ西洋ヲ以テ憂トナス、或人公ニ就テ方略ヲ請フ、公曰ク、此レ與ミシ易キノミ、終ニ

曾國藩

中國ノ患ヲ爲ス者ハ、魯西亞カ、吾レ老タリ、君等當サニ之ヲ見ルヘシ、是ノ時魯西亞支那ニ交通セサル數十年、聞ク者皆之ヲ疑フ、曾國藩、咸豐元年刑部左侍郎トナル、此時洪秀全所在ヲ陷レ、勢頗ル猖獗、詔シテ國藩ヲシテ之ヲ討勦セシム、是ニ於テ兵ヲ長沙ニ治メ、戚繼光ノ束伍ノ法ニ倣ヒ、僅ニ一縣ノ人ヲ以テ、諸省ニ轉戰シ、遂ニ湖北ヲ定メ、軍威大ニ振フ、是ヨリ國藩諸將ヲ指揮シ、自カラ全局ヲ總持シ、百戰卒ニ賊ヲ平ク、議者謂フ、粵賊戡定ノ功、國藩之ヲ始ニ倡

へ、之ヲ終ニ總フ深遠ノ謀、堅卓ノ力、往古ノ名臣ニ求ムルモ、罕ニ覩ル所ナリ、西洋通商以來、中外情形大ニ變ス、國藩時勢ノ艱ヲ知り、務テ條約ヲ守定シ、示スニ誠信ヲ以テシ、制器、學校、操兵、尤モ意ヲ致ス、同治十一年疾テ薨ス、城中士女、父母ヲ喪スルカ如シ、詔シテ大傅ヲ贈リ、專祠ヲ建ツ、李鴻章カ奏疏ニ云フ、曾國藩ノ人トナリ、事ニ臨テ謹慎動テ繩墨ニ應スル、諸葛亮ニ似タリ、謀ヲ發シ、策ヲ決シ、物ニ應シ、務ヲ度ルハ、陸贄ニ似タリ、默シテ精要ヲ究メ、始終誠一ナルハ、司馬光ニ似

タリ、臣曾國藩ニ於テ師トシ事フル三十年、既ニ聞見スル所アリ固リ、好ニ阿テ溢美セス、

第三十五章

支那現今ノ制度形勢等

今上帝

今上光緒 (Kwangsi) 帝ハ我紀元二千五百三十一年ニ生ル、咸豐 (Hien-fung) 帝ノ弟醇 (Shun) 親王ノ子ナリ、紀元二千五百三十五年一月二十二日、先帝穆宗崩シテ子ナシ、故ニ入テ位ニ即ク、時ニ歲甫メテ四年ナリ、帝ハ久シク慈禧西太后ノ攝政ヲ

政躰

受ケタリシカ、二千五百四十七年三月ニ至リテ、親ラ政務ヲ執ルヲ得タリ、
 皇帝ハ無限ノ權ヲ有シ、何事ニ限ラス其欲スル所ヲ行フヲ得ルナリ即君主專制ノ政躰ニシテ、更ニ憲法ノ設ナシ又輿論公議ノ政府ヲ嚮導シ、或ハ之ヲ支持スルモノナシ、故ニ政府ニ於テ處理スル萬般ノ事務ハ、悉ク之ヲ皇帝ノ責任ニ歸シテ、諸大臣ハ關係ナキモノ、如シ、是ヲ以テ皇帝ノ聰明ニシテ、事理ニ通達シタル人ナル時ハ、其臣民ニ恩惠ヲ施コシ、國事ヲ改進スルニ容易

ナレモ之ニ反シテ暗愚ノ君ナル時ハ、其禍實ニ大ナリ

支那政府ノ一大部門ハ、內閣(Wei-Ko)ニシテ四人ノ大臣ト、二人ノ翰林學士アリ (四人ノ大臣ノ内二人ハ支那本部ノ人ナリ) 之ニ屬スル十人ノ參事官アリテ、亦半ハ滿人、半ハ漢人ヲ用ル、其職務ハ勅令閣令ヲ發シ、又政務ヲ奏上シ、之ニ就テ裁定ヲ奉受シ、而シテ之ヲ主任ノ部局ニ移シテ執行セシム、又內閣ハ二十五箇ノ印璽ヲ保管ス、又內閣ノ外ニ參議院アリ、名義上、內閣ノ次ニ列スト雖モ、政府中

最モ威權アルモノトス、其議員ハ親王、大學士、六部ノ尙書長官及侍郎次官ヨリ組織セルモノニシテ、其職掌ハ敕令及敕裁ヲ奉書シ、君主ヲ輔佐シテ、政務ヲ規正スルニアリ、又皇帝モ時々此院ニ親臨ス、又參議院ハ官吏ノ進級及叙任ニ關シテ、其名簿ヲ管理シ、諸官衙ノ行爲ヲ監督ス、内閣及參議院ノ外ニ、六部ノ官衙アリ、即チ第一戸部、第二禮部、第三吏部、第四兵部、第五刑部、第六工部是ナリ、此各部ニハ尙書二人、左右侍郎六人、郎中八人、其他檢査役書記等ノ諸員アリ、而シテ

郎中以上ハ支那本部ノ人ト、滿州ノ人ト、相半ハスルヲ例トス、又外國ニ關スル事務ヲ處理スル爲ニ設ケタル總理衙門ト稱スル一官衙アリ、其長ハ親王ニシテ、其下ニ六人ノ大臣アリ、其他小部局ニハ都察院、理藩院、大理寺、大常寺、翰林院、鴻臚寺、光祿寺、國子監、欽天監等アリ、都察院ノ如キハ四十人乃至五十人ノ議員アリテ、長二人アリ、此院ノ議員ハ、昔時ヨリノ慣習ニヨリテ、何事ニテモ、皇帝ニ諫奏スルヲ得ルナリ、以上ノ諸官衙總テ北京ニアリ、

地方ノ制度

全國ヲ分テ十八省トシ、十八省ノ名前ニアリ略ス更ニ盛京、吉林、臺灣等ノ諸省アリ、十八省又左ノ如クニ分ツ、

直隸	山東	山西	河南	東部地方	江蘇	安徽	北部地方
府	一〇	九	九	八	八	八	府
鎮	三	〇	三	〇	三	〇	鎮
州	二	一	一	〇	六	九	州
縣	一二四	九六	八五	九七	六二	五〇	縣
面積英方里	五八、九四九	六五、一〇四	五五、二六八	六五、一〇四	九二、九六一	九二、九六一	面積英方里
首都	奉天	濟南	太原	開封	江寧	安慶	首都

江西	浙江	福建	中部地方	湖北	湖南	南部地方	廣東	廣西	雲南	貴州
一三	一一	一〇	一〇	一〇	九	九	九	二	一四	一二
二	一	三	〇	〇	三	三	五	八	八	八
二	一	二	八	八	七	七	二	三	三	一
七五	七六	六二	六〇	六〇	六四	六四	七九	四七	三九	三四
七二、一七六	三九、一五〇	五三、四八〇	二四四、七七〇	二四四、七七〇	二四四、七七〇	二四四、七七〇	七九、四五六	七八、二五〇	一〇七、九六九	六四、五五四
南昌	杭州	福州	武昌	武昌	長沙	長沙	廣東	桂林	雲南	貴陽

西部地方	陝西	甘肅	四川	十八
	七	九	一三	一八三
	五	七	一五	六九
	一〇	一三	一九	二〇
	七三	五二	一一二	一一八五
	二五四、〇〇八		一六六、八〇〇	一二九七、九九九
	西安	蘭州	成都	

此諸省ノ政治ハ總督巡撫ニテ之ヲ統治ス、巡撫專ラ本省ヲ轄シ、總督ハ二三省ヲ總フ、或ハ總督ヲ以テ巡撫ヲ兼ヌルアリ、巡撫、總督ノ權ハ殆ト無限ニシテ、其省人民ノ上ニハ非常ノ力アリ、恰モ帝ノ權力ノ國內ニ於ケルト同一ナリ、其職ハ

文武ノ事務ヲ總轄シ、其下ニ會計官、刑事官、學政、案察使、縣令、州宰等アリテ、之ヲ補佐シ、土地、財政、司法、學生ヲ試験スル等ノ事ヲ司ル、省政ノ是非ニ就テハ、左都御史ニ於テ、中央政府ニ報道シ、若クハ彈劾スルノ權アリ、省費ハ、其省ニ於テ徵集セル租稅ニテ支辨シ、殘額ハ國庫ニ送致スルナリ、又各省ニ於テ財政ノ困難アル時ハ、新稅ノ收入アル迄、一時人民ヨリ金圓ヲ借り、用度ニ充ツル事アリ、此等ハ皆巡撫ノ掌ル所ナリ、

官階品級

正一品 太師、太傅、太保、大學士、
 從一品 少師、少傅、少保、太子太師、全太傅太保、
 各部院尚書、都察院左右都御史、
 正二品 太子少師、全少傅少保、總督、左右侍郎、
 從二品 內閣學士、翰林院掌院學士、巡撫、布政使、
 正三品 左右副都御史、通政使、詹事、案察使、
 從三品 光祿寺卿、鹽運使、太僕寺卿、
 正四品 通政司副使、少詹事、順天府丞、各省主巡道、
 從四品 國子監祭酒、內閣侍讀學士、侍讀學士、知府、
 正五品 左右春坊庶子、給事中、郎中、治中、同知、

各直隸知州、各府同知、通政使參議、理事官、
 從五位 翰林侍讀學侍講、監察御史、員外郎、知州、
 正六品 內閣侍讀、司業、通判、經歷、五官正、
 從六品 翰林院修撰、僧錄司闡教、道錄司、
 正七品 翰林院編修、筆貼式、主簿、知縣、
 從七品 檢討、中書、主簿、博士、經歷、
 正八品 翰林院五經博士、朝鮮通事、各部院筆貼式、
 從八品 翰林院典簿、布政使照磨、僧錄司覺義、
 正九品 五官司書、各府知事、茶馬大使、
 從九品 翰林院待詔、五官司農、僧錄司、都綱、府陰陽、

武衛官階品級

- 正一品 領侍衛內大臣
- 從一品 內大臣、八旗滿州、蒙古漢軍都統、外省駐防將軍
- 正二品 統領、總兵、副都統
- 從二品 散秩大臣、副將
- 正三品 一等侍衛、參領、總管、王府長史、參將
- 從三品 一等護衛、遊擊、參領
- 正四品 二等侍衛、佐領、協尉、聖廟百戶
- 從四品 城門領、察哈爾副參領、太僕寺馬廠駝廠總管
- 正五品 三等待衛、步軍副尉、步軍校、防禦

歲入

- 從五品 守禦所千總、四等待衛
 - 正六品 藍翎侍衛、營千總
 - 從六品 衛千總、內務府六品翎長
 - 正七品 城門吏、弓匠固山達、把總、七品廕監生
 - 從七品 盛京遊牧副尉
 - 正八品 八品廕監生、外委千總
 - 從八品 委署親軍校、副護軍校
 - 正九品 外委把總
 - 從九品 太僕寺委署固山達、額外外委
- 支那ノ歲入ハ左表ノ如シ、此表ハ千八百八十八年、刊行ノステータスマンイヤー

ブツク、
ニ據ル

税目

金高

二〇、〇〇〇、〇〇〇兩

地租
銀 米

二、八〇〇、〇〇〇、

鹽稅

九、六〇〇、〇〇〇、

海關稅

一五、〇〇〇、〇〇〇、

過關稅及他ノ諸稅

一、九〇〇〇、〇〇〇、

合計

六六、四〇〇、〇〇〇

凡ソ我カ八千九百六十四萬圓

此ノ正稅ノ外ニ臨時必要ノ場合ニ於テハ、官位

百

歳出

ヲ賣ルコト、及富豪ノ者ニ御用金ヲ課スルコト
ノ二法アリテ、大ナル財源ナリシカ、官位ヲ賣ル
ノ一法ハ、十年以前ニアツテ、既ニ廢セラレタリ、
然レモ爵位ヲ賣ルコトハ、今尙ホ盛ニ行ハル、此
ノ表ノ外ニ、尙ホ幾多ノ歳入アルハ、疑フ可ラサ
ル事實ナリ、
支那政府ノ經費ハ、精密ニ之ヲ知ルニ由ナシト
雖モ、左ニミツドルキングトム中ニ掲クル表ヲ
示サン、

經費ノ要目

文武官ノ俸給

七、七七三、五〇〇、兩

歩兵六十萬人一人一ヶ月三兩ノ割

二二、六〇〇、〇〇〇、

騎兵二十四萬二千人一ヶ月四兩ノ割

一一、六一六、〇〇〇、

騎兵馬匹一頭ニ付二十兩

四、八四〇、〇〇〇、

被服料一人四兩

三、三六八、〇〇〇、

小銃及軍需

八四二、〇〇〇、

海軍及其他

一三、五〇〇、〇〇〇、

運河及運輸

四、〇〇〇、〇〇〇、

城塞、砲兵、軍費等

三、八〇〇、〇〇〇、

總計

七一、三三九、五〇〇、

外國債

宗教

此計算ハ、近時ノ者ニ非スト雖モ大ニ信憑スヘキ者ニシテ、之ニ國債ノ利子ヲ加フレハ、凡ソ歳出ノ額ヲ知ルヘシ、且此ノ表ニ於テ、歳出費目ノ割合ヲ知ルニ便ナレハ、暫ク此ニ掲ク、

政府ハ近年マテ、外國債ヲ募集スルコトヲ好マサリシカ、今ヨリ凡十五年、六十萬磅餘ノ外債ヲ募集シテ、之ニ八朱ノ利ヲ附シ、海關稅ノ收入ヲ以テ、其償却ニ當ツルコト、爲セシヨリ、後屢外債ヲ募リテ、現時ハ五百萬磅ノ額ニ達セリ、儒教、佛教、道教ノ三教ハ共ニ支那人ノ尊信スル

所ナレハ、獨リ儒教ハ國教ノ如キ姿ナリ、然レハ
 儒教ニ於テハ、唯ニ祖先ヲ崇拜スルコトノミ、宗
 教ノ觀アレハ、其他ノ儀式ニ至テハ、宗教トシテ
 見ルヘキモノニ非ス、又支那ノ道義ハ、皆孔子ノ
 教義ニ基ツキテ、之ヲ標準トス、
 支那本部ノ人民ハ、多ク前ニ示シタル三教ヲ信
 スレハ、支那ノ東北、及西南部ノ人民中、回教ヲ信
 スルノ徒アリテ、其數凡三百萬人アリト云フ、此
 他羅馬教ヲ信スルモノ凡ソ一百萬人、プロテス
 タントノ信者凡ソ五萬人アリト云フ、

人口

支那現今ノ人口ハ、未ダ精密ナル計算ヲ遂ケタ
 ルモノナシ、故ニ各國政府ノ最モ必要トセル完
 全ノ戸籍ハ、支那帝國ニ絶テアルコトナシ、是ヲ
 以テ支那ハ只人口ヲ臆算シテ、課税ノ表準ヲ立
 ツルノミ、西曆千八百十二年嘉慶帝ノ時ノ統計ハ、最
 モ精確ナル人口ノ數ヲ示スモノナリト云フ、之
 ニ由ル時ハ、支那本部(十八省)ニテ人口三億六千
 二百四十四萬七千八百八十三アリテ、一平方英里
 ニ凡二百人ノ割合ナリ、又千八百八十一年、支那
 帝國税關ノ報告ニハ、三億八千萬ナリトセリ、

教育

清ノ學制ハ、明ノ制ニ因テ、稍之ヲ增損ス。京師ニ國子監ヲ設ケ、又府、州、縣、各學校ノ設アリ、教授、教諭、訓導等アリテ、之ヲ教フ。小兒七歳ニシテ學ニ入り、應對進退ノ法ヲ學ヒ、十歳ノ頃ヨリ私塾ニ入りテ、晝夜書數ノ業ヲ受クル者アリ、十三歳ニ至リテ、音學及詩ヲ學ヒ、又弓馬槍劍ノ術ヲ磨ク、二十歳ニシテ正丁トナリ、社會ノ實業ニ就ク者アリ、又增、學術ヲ脩メテ進士及第ヲ望ム者アリ、初メ小兒ノ學ニ入ルヤ、師ニ就テ三字經、千字文、孝經ノ類ヲ素讀誦スルニ止リ、我カ國小學校ノ如キ完全ナルモノニ非ス、理化學、數學ノ類ハ絶テ之ヲ教フルコトナシ、又普通教育ノ方法等ハ唯慣習ニ從テ行フノミニシテ一定ノ制度アリ

ルニ非ス而シテ小學教師ノ過半ハ、文學ニ因テ官吏タラントノ望ヲ以テ、勉學シタル候補者ノ失敗シタル者ニシテ、他ノ業務ヲ執ル能ハサル者ナリ、

文學上ノ階級ニ四アリ、第一ヲ秀才 (Sin Tsai) ハ秀才

ト ("Bachelor of arts") ニ似タル者ニシテ、此學位ヲ得ルニハ、知縣ノ試験ヲ受ケサル可ラス、試験ハ學正 (High ching) 及教諭 (Kinoyu) ニテ之ヲ掌ル、試験ハ問題ニ就テ、終日ニ答案ヲ作ラシメ、優劣ヲ判シ、及落ヲ定ム、受験者凡ソ四千人ニシテ、僅カニ三十人位ノ及第者アリ

第一ヲ舉人 (Ku-jin) 第一ノ秀才ニ登第シタル者ハ、此學位行ハレ、教授之ヲ掌ル、此試験ハ三ケ年ニ二度之ヲ行フ、金カノ學力ニ優ル者ハ、此學位ヲ受ク、二百弗乃至千弗ノ相場ニテ官ヨリ之ヲ賣ルナリ、前年ノ如キハ政府ノ財ヲ要スルコトアリテ、二十五弗ニテ賣リタルコトアリ、此ノ試験ヲ受クル時ハ、其衣服、帽、靴、等、總テ嚴密ニ之ヲ改メ、試験場ニ入ル、ナル、而シテ此試験ハ、陰曆八月九日、十二日、十五日ノ三日

ニ十八省首府ニ於テ同時ニ行フモノトス、其人員廣東省ノ如キハ六千人位ナレトモ、大省ニテハ七八千人以上アリト云

第三ヲ進士 (Jinshi)

別此試驗ハ北京ニ於テ行ハレ、各人各別室ニ入レテ行ハレ、第二ノ試驗ニ比

スレハ頗ル嚴ナル試験ヲ受ク、唯與ヘラル、者ハ紙ト墨筆、其他食用ニ供スル物ノミ、北京ノ試験場ニハ一萬ノ室アレ、僅カニ一人ヲ容ル、ニ足ルノミ、此ノ如キ室ニ閉錮セラレ、牀質ノ健康ナラサルモノハ死ニ至ルアリ、此試験ニハ年齢ニ限リナキヲ以テ六十以上或ハ八十ノ老人モアリト云フ、平均ハ三十以上ナリ、試験ハ四書五經及歴史上ノ問題ニ就キ、答案ヲ作ラシメ、月ノ第一日ヨリ九日間、此ノ狹隘ナル一室ニ閉居セシム、十一日日出ノ時再ヒ此ニ集ル、(此時前テ皆又室ヲ出ツ、翌朝更ニ合格者ヲ撰テ、法律、歴史、地理等ノ問題ニ就キテ試験ニ十六日ニ至ク、試験ヲ終ル、學士答案ヲ檢シ、二十五日間ニ至ク之ヲ終ル、若シ受験者ヲ五千人トスル時ハ各人十三ノ答案ヲ作ルカ故ニ、六萬五千ノ答紙ヲ得ル

海陸軍

ナリ、此内ヨリ七八十人ヲ撰フナリ、及第者ハ三發ノ祝砲ト共ニ、其姓名ヲ揭示セラル、政府ニテ試験ノ爲ニ要スル費用ハ殆ト三十萬兩ナリト云フ、此試験モ三年ニ一度ニシテ、又十年ニ特別ニ一度アリ、或ハ戰勝即位帝ノ婚儀等ノアリシ時ニ之ヲ行フ、進士ヨリ、官途ニ即クヲ得ルナリ、

第四ヲ翰林 (Hanlin) ト云フ、

翰林ハ學位ヨリ、寧ロ官位ト稱スヘキモノニシテ、毎

三年ニ之ヲ行ヒ、之ニ及第シタル者ハ翰林學士トナリテ、給料ヲ受クルモノトナルナリ、

八旗ノ總兵員ハ、三十二萬三千八百人ニシテ、其中十萬人ハ、毎年一回北京ニ於テ、皇帝ノ觀兵スル所ナリト云フ、又禁裡ノ衛兵ハ七百七十七人アリ、

國民軍 (Ying Ping) ハ、六千四百五十九ノ士官ト、六

十五萬ノ兵卒トヨリ成ル、支那ノ兵制ニ就キテハ、確實ナルユトヲ知ルニ難シト雖モ、現今ハ盛ニ泰西ノ兵式ニ因テ、其兵ヲ訓練シ、兵艦、銃器、皆泰西ノ新式ニ法トリ、大ニ進歩ヲ致セリ、海軍ノ進歩モ亦著シク、其首府北京ヲ護衛スル、北洋艦隊最モ強勁ニシテ英國海軍士官ノ指揮訓練ヲ受ク、西曆千八百八十五年、獨乙ニ於テ新造セル、定遠鎮遠 (Ting yuen Chen yuen) ノ姊妹艦ノ如キハ、頗ル堅牢ナルモノニシテ、排水噸七千三百三十五、六千

馬力、十四ノット半ノ速力ヲ有ス、之ニ屬スル一切ノ武器皆備ハル、其他二千噸以上ノ巡洋艦數艘アリ、又北支那艦隊ニ屬スル數多ノ船艦アリ、水雷艦モ亦近年ニ至リテ採用スルニ至レリ、

土地及人口

地名	英方里	人口
支那本部	一、二九七、九九九	三、八三〇、〇〇〇、〇〇〇
滿州	三、六二二、三一〇	一、二、〇〇〇、〇〇〇
モンゴリヤ	一、二八八、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
チベット	六、五二一、五〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇
東トルキスタン	一、四三一、八〇〇	五、八〇〇、〇〇〇
合計	四、〇三二、六〇九	四、〇三三、五八〇、〇〇〇

外國人	
西曆千八百八十六年ニ、外國人ノ支那ニ居留スル者總數七千六百九十五人アリ、其内	
英國人	三、四三八、
米國人	七四一、
日本人	七七七、
獨乙人	六二九、
佛國人	四七一、
西班牙人	三一九、
其他ノ國人	一、三二〇、
以上ノ外國人ハ、各開港場ニ住居スルモノナレ	

貿易	國名	輸入	輸出	全貿易額
		輸入	輸出	全貿易額
英國	二二、〇三四、七五三、	一九、七四五、六九四、	四一、七八〇、四四七、	
香港	三四、八八九、六七一、	二二、五五二、六七六、	五七、四四二、三四七、	
印度	一六、九八〇、〇三五、	五三一、六〇一、	一七、五一一、六三六、	
米國	四、六四七、三三三、	九、六八五、六九一、	一四、三三三、〇二四、	
歐洲諸國	二、七四九、〇八三、	一一、九二八、四〇四、	一四、六七七、四八七、	
日本國	五六九一、四八九、	一、二二二、〇三六、	六、九一三、五二五、	
魯國	二〇二、九一八、	七、〇三九、三三二、	七、二四二、二五〇、	
合計	八七、一九五、二八二、	七二、七〇五、四三四、	一五九、九〇〇、七一六、	

貿易品中、其重要ナル者ハ、輸入品ニ、阿片、綿布、綿毛織物、金屬、石炭ノ類ニシテ、阿片ニ二千五百萬兩、綿布ニ、三千萬兩ヲ消費ス、又輸出品ニハ、茶、絹、砂糖、蠶組織、毛革、紙等ニシテ、其多額ヲ占ムルモノハ、茶ニ三千萬兩、絹ニ二千萬兩ナリ、列國中、最も多ク支那ト貿易スル國ハ、英國ニシテ、毎年貿易全額ノ三分ノ一ヲ占ムルト云フ、現時外國ト貿易スル爲ニ開ク處ノ港市、二十二アリ、就中上海ハ、西曆千八百五十四年ニ開ク所ノ交易場ニシテ通商最も盛ナリトス、支那ノ外國貿易ハ、帝

國稅關局ノ處理スル所ニシテ、英國人其長タリ、千八百五十五年、支那ノ開港場へ出入シタル船舶ノ數及其噸數左ノ如シ、

船舶 二萬三千四百四十艘 此噸數千八百六萬八千七百七十七噸

内 汽船 一萬八千六百九十一、此噸數千七百一萬二千九百三十噸

帆船 四千七百四十九、此噸數 百五萬五千二百四十七噸

船舶ノ出入最も多キハ英國ニシテ、

船數 一萬三千五百二十二、噸數千八百八十四萬二千二百五十五

其ノ他ハ左表ノ如シ

支那本國ノ船 四千三百四十五、噸、二百二十四萬三千五百三十四

交通

獨乙國ノ船 二千二百三十、噸、百二十一萬七千六百八十五
 日本國ノ船 二百八十六、噸、二十一萬五千五百八十五
 米國ノ船 二千五百二十四、噸、二百二十六萬千七百五十、
 佛國ノ船 四十六、噸、七萬三千三百五十五
 支那内地ノ交通ハ陸路、川河、溝渠等ニ據ルト雖
 モ、道路ノ修繕甚タ惡シクシテ、交通不便ヲ極ム、
 支那ノ内地ハ鐵道ノ布設ニ適シ、殊ニ人口夥多
 ナル場所ニ於テハ、最モ容易ニ架設スルヲ得レ
 凡支那政府ハ未タ文明ノ利器ヲ使用スルニ銳
 意熱心ナラス、人民モ亦西洋ノ文明ヲ嫌惡スル

ノ傾向アリテ、鐵道ノ如キモ、今僅カニ開平炭坑
 ヨリ、運河ニ達スル、七英里ノ鐵道アルノミ、
 按スルニ支那ニ於テ、最初ニ鐵道ヲ布設シタ
 ルハ、英國人ニシテ、上海ト吳松トノ間、凡ソ四
 十英里ヲ聯絡シタリシカ、支那政府ハ之ヲ高
 價ニ買ヒ上ケテ、軌條ヲ壞テ、諸機械ヲ庫中ニ
 收メタリ、支那政府ノ處置固ヨリ笑フヘシト
 雖モ、人民ノ愚亦憐レムニ堪ヘタリ、
 鐵道ハ、右ノ如キ有様ニシテ布設シタルモノ少
 シト雖モ、電線ノ架設ハ甚タ多ク、西曆千八百八

度量及通貨
ノ割合

十四年ニ里數三千〇八十九英里ノ長サニ達シ、
此ノ線ノ延長五千四百八十二英里アリ
近年ニ至
寧波、福州、朝鮮ニモ架設
セリ、其進歩驚クヘシ、

重量

両、「リヤン」又ハ「テール」ハ

英ノ二「オンス」三分ノ一
我カ凡ソ七匁五分

擔、「ピュル」百斤ハ

英ノ百三十三「ポンド」三分ノ一
我カ凡ソ十六貫目

斤、「キン」又ハ「キヤチー」ハ

英ノ二「ポンド」三分ノ一
我カ凡ソ百六十匁

尺度

里、「リ」ハ

英ノ凡ソ三分ノ一マイル
我カ凡ソ四町五十四間

丈、「チヤン」ハ

英ノ十一「フィート」三分ノ一
我カ曲尺凡ソ同シ

尺、「チ」ハ

英ノ十四「インチ」十分ノ一
我カ曲尺凡ソ同シ

通貨

両、「テール」ハ

英ノ凡ソ五「シリング」三分ノ一
我カ凡ソ金貨一圓

錢、「メース」

十錢チ一両トス、

厘、「キヤンダリオン」十厘チ一錢トス、

毛、「キヤシ」

十毛チ一厘トス、

支那文明史略卷之六終

北 京 試 驗 場 之 圖



以下帝王年代ノ表ハ中外年表ニ據ル本
文ト異同アレモ今改メス

帝王	即位ノ年西 曆紀元前	在位ノ年	承嗣
太昊伏羲氏	二九五三	一一五	
炎帝神農氏	二八三八	一四〇	
黃帝有熊氏	二六九八	一〇〇	
少昊金天氏	二五九八	八四	黃帝ノ子
顓頊高陽氏	二五二四	七八	黃帝ノ孫
帝嚳高辛氏	二四三六	七〇	少昊ノ孫
帝	二三六六	九	帝嚳ノ子
帝堯陶唐氏	二三五七	一〇二	帝嚳ノ子

夏

帝王	即位ノ年西 曆紀元前	在位ノ年	承嗣
帝舜有虞氏	二三五五	五〇	
九帝		七四八	
大禹	二三〇五	八	
帝啓	二二九七	九	禹ノ子
太康	二二八八	二九	啓ノ子
仲康	二二五九	一三	太康ノ弟
帝相	二二四六	二八	仲康ノ子
少康	二二一八	六一	帝相ノ子
帝杼	二〇五七	一七	少康ノ子
帝槐	二〇四〇	二六	帝杼ノ子
帝芒	二〇一四	一八	帝槐ノ子

沃	祖	祖	河	外	仲	太	雍	小	太	沃
			亶							
甲	辛	乙	甲	壬	丁	戊	己	甲	康	丁
一四九〇	一五〇六	一五二五	一五三四	一五四九	一五六二	一六三七	一六四九	一六六六	一六九一	一七二〇
二五	一六	一九	九	一五	一三	七五	一二	一七	二五	二九
祖	祖	河	外	仲	太	雍	小	太	沃	太
辛	乙	亶	壬	丁	戊	己	甲	康	丁	甲
弟	子	子	弟	弟	子	弟	弟	子	弟	子

商

太	成		桀	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
		十七				孔			不	
甲	湯	主	癸	發	皐	甲	廙	肩	降	泄
一七五三	一七六六		二八一八	二八三七	二八四八	一八七九	二九〇〇	一九二一	一九八〇	一九九六
三三	一三	四三九	五二	一九	一一	三一	二一	二一	五九	一六
成	湯		帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
孫	ノ		廙	皐	孔	不降	肩	不降	泄	芒
			子	子	子	子	子	弟	子	子

祖	南	陽	盤	小	武	祖	祖	廩	庚
丁	庚	甲	庚	辛	乙	丁	庚	甲	辛
一四六五	一四三三	一四〇八	一四〇一	一三七三	一三五二	一三二四	一二六五	一二五八	一二三五
三二	二五	七	二八	二二	二八	五九	七	三三	六
祖	沃	祖	陽	盤	小	小	武	祖	祖
辛	甲	丁	甲	庚	辛	辛	丁	庚	甲
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
子	子	子	弟	弟	弟	子	子	弟	子

周

武	太	帝	紂	武	成	康	昭	穆	共
乙	丁	乙	辛	王	王	王	王	王	王
二一九八	二一九四	二一九一	二二五四	一一二二	一一一五	一〇七八	一〇五二	一〇〇一	九四六
四	三	三七	三三	六四四	七	三七	二六	五一	五五
庚	武	太	帝	文	武	成	康	昭	穆
丁	乙	丁	乙	王	王	王	王	王	王
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

襄	頃	匡	定	簡	靈	景	敬	元	貞	考
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王
六五一	六一八	六一三	六〇六	五八五	五七一	五四四	五一九	四七五	四六八	四四〇
三三	六	六	二二	一四	二七	二五	四四	七	二八	一五
惠	頃	襄	王	王	王	王	王	王	王	王
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

懿	孝	夷	厲	宣	幽	平	桓	莊	僖	惠
王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王
九三四	九〇九	八九四	八七八	八二七	七八一	七七〇	七一九	六九六	六八一	六七六
二五	一五	一六	五一	四六	一一	五一	二三	一五	五	二五
共	共	懿	夷	厲	宣	幽	平	桓	莊	僖
子	弟	子	子	子	子	子	孫	子	子	子

漢										
哀	成	元	宣	昭	武	景	文	呂	惠	高
帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	太后	帝	帝
五	三二	四七	七二	八五	一三九	一五五	一七八	一八六	一九三	二〇一
六	二六	一六	二五	一三	五四	一六	二三	八	七	八
成帝ノ子	元帝ノ子	宣帝ノ子	武帝ノ曾孫	武帝ノ子	景帝ノ子	文帝ノ子	惠帝ノ養子	惠帝ノ母	高帝ノ子	

秦									
二世	始		東	赧	慎	顯	烈	安	威
世	皇	三十五	周	王	觀	王	王	王	烈
帝	帝	君	君	王	王	王	王	王	王
二〇九	三三一		二五五	三二四	三三〇	三六八	三七五	四〇一	四二五
一五	三	一二	八七四	一七	五九	六	四八	七	二六
始皇帝ノ子					慎觀王ノ子	顯王ノ子	烈王ノ弟	安王ノ子	威烈王ノ子
									考王ノ子

東漢										
安	殤	和	章	明	光	十五	淮陽王	僞新王莽	孺子嬰	平帝
帝	帝	帝	帝	帝	帝		王	莽	嬰	帝
一〇七	一〇六	八九	七六	五八	二五		二三		六	一
一九	一	一七	二三	一八	三三	二二六	二	一四	三	五
章帝ノ孫	和帝ノ子	章帝ノ子	明帝ノ子	光武帝ノ子	景帝ノ裔				宣帝ノ玄孫	元帝ノ孫

西曆紀元後

三國 蜀漢										
魏	文	後	昭	獻	靈	桓	質	沖	順	
	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	
	二		十二							
	二三四	二三九	二三七	一九〇	一六八	一四七	一四六	一四五	一二六	
	七	四三	二	一九五	三〇	二二	一	一	一九	
		昭烈帝ノ子		靈帝ノ子	章帝ノ玄孫	章帝ノ曾孫	章帝ノ曾孫	順帝ノ子	安帝ノ子	

簡	帝	哀	穆	康	成	明	元	愍	懷	惠
帝	奕	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝

三七二	三六六	三六二	三四五	三四三	三二六	三二三	三二七	三一三	三〇七	二九〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

二	五	四	二七	二	一七	三	六	四	六	一七
元	哀	成	康	成	明	元		武	惠	武
帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝		帝	帝	帝
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ		ノ	ノ	ノ
子	弟		子	弟	子	子		孫	弟	子

晉 吳

武	末	景	廢	大	宋	少	廢	明
帝	四	帝	帝	帝	五	帝	帝	帝

二八〇	二六二	二五六	二五二	二二〇	二七四	二六八	二五四	二四二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

一〇	六〇	一八	六	五	三一	四六	六	六	二四	一三
		景							明	文
		帝							帝	帝
		ノ							ノ	ノ
		子							子	子

梁										齊									
元	簡	武		和	東	明	武	高	順										
帝	文	帝	五	帝	昏	帝	帝	祖	八										
五五二	五五〇	五〇二		五〇一	四九九	四九四	四八三	四七九	四七七										
三	二	四八	二三	一	二	五	二	四	五九										
武帝ノ第七子	武帝ノ第三子	蕭衍		明帝ノ子	明帝ノ子	高祖ノ兄	高祖ノ子	蕭道成	明帝ノ子										

宋														
廢	明	廢	孝	文	廢	武		恭	安	孝				
帝	帝	帝	武	帝	帝	帝	十五	帝	帝	武				
										帝				
四七三	四六六	四六五	四五四	四二四	四二三	四二〇		四一九	三九三	三七三				
四	七	一	二	三〇	二	三	一四〇	一	二	二				
明帝ノ子	文帝ノ子	孝武帝ノ子	文帝ノ子	武帝ノ子	武帝ノ子	劉裕		安帝ノ弟	孝武帝ノ子	簡文帝ノ子				

唐									
代	肅	立	睿	中	武	中	高	太	高
					太				
宗	宗	宗	宗	宗	后	宗	宗	宗	祖
七六三	七五六	七二三	七二〇	七〇五	六八四	六八四	六五〇	六二七	六二〇
一七	七	四三	三	五	二〇	二	三四	二三	七
肅宗ノ子	玄宗ノ子	睿宗ノ子	中宗ノ弟	重祚	中宗ノ母	高宗ノ子	太宗ノ子	高祖ノ子	李淵

隋					陳				
恭	煬	文	後	宣	臨	文	武	敬	
					海				
帝	帝	帝	五	主	帝	王	帝	四	帝
六一八	六〇五	五八九	五八三	五六九	五六七	五六〇	五五七	五五五	
二	一三	一六	三三	六	一四	二	七	三	五五
煬帝ノ孫	文帝ノ子	楊堅		宣帝ノ子	文帝ノ弟	文帝ノ子	武帝ノ甥	陳竊先	元帝ノ第九子

昭	僖	懿	宣	武	文	敬	穆	憲	順	德
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗
八八九	八七四	八六〇	八四七	八四一	八二七	八二五	八二一	八〇五	八〇五	七八〇
一六	一五	二四	二三	二六	二四	二	四	五 五月	七 七月	三五
僖宗ノ七子	懿宗ノ子	宣宗ノ子	憲宗ノ十三子	穆宗ノ五子	穆宗ノ二子	穆宗ノ長子	憲宗ノ子	順宗ノ子	德宗ノ子	代宗ノ子

後晉				後唐		五代後梁				
高	潞	閔	明	莊	末	太	昭			
祖	四王	宗	宗	宗	二帝	祖	宣			
九三六	九三四	九三四	九二六	九三三	九一三	九〇七	二二			
七	一三 八月	四 四月	八	三	一〇 太祖ノ第三子	六 朱全忠	二 昭宗ノ九子			
石敬瑭	明宗ノ養子	明宗ノ子		存勗						

○附錄

三十一

二十

北宋	後周	後漢						
太祖	太祖	世宗	恭宗	高祖	隱帝	高祖	齊王	
宗	祖	帝	宗	祖	帝	祖	王	
九七六	九六〇	九六〇	九五四	九五五	九四九	九四七	九四六	
十二月	十一月	一月	六月	三月	四月	二月	二月	四月
太祖ノ弟	趙匡胤	世宗ノ四子	太祖ノ養子	郭威		高祖ノ子	劉知遠	高祖ノ姪

南宋								
光宗	孝宗	高宗	欽宗	徽宗	哲宗	神宗	英宗	仁宗
宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗
一一九〇	一一六三	一一二七	一一二六	一一〇一	一〇八六	一〇六八	一〇六四	一〇二三
五月	二月	三月	十一月	二月	二月	一月	四月	二月
孝宗ノ子	高宗ノ子	徽宗ノ子	徽宗ノ子	神宗ノ子	神宗ノ子	英宗ノ子	仁宗ノ子	真宗ノ子

元										
仁	武	成	世	帝	端	恭	度	理	寧	
宗	宗	宗	祖	九	曷	宗	宗	宗	宗	宗
一三一三	一三〇八	一二九五	一三七九		一二七八	一二七六	一二七五	一三六五	一三二五	一一九五
九	四	一三	一六	一五二	二二	二	一	一〇	四〇	三〇
成宗ノ弟	成宗ノ姪	世祖ノ孫	忽必烈ノ孫		度宗ノ末子	度宗ノ長子	度宗ノ二子	理宗ノ子	高宗ノ裔	光宗ノ子

明										
宣	仁	成	惠	太	順	文	明	泰	英	
宗	宗	祖	帝	祖	九	帝	宗	宗	帝	宗
一四二六	一四二五	一四〇三	一三九九	一三六八		一三三三	一三三〇	一三二九	一三二四	一三二一
一〇	一	二二	四	三一	八九	三五	三	一	五	三
仁宗ノ子	成祖ノ子	太祖ノ四子	太祖ノ孫	朱元璋		明宗ノ子	武宗ノ第二子	武宗ノ第一子		仁宗ノ子

清								
今	穆	文	宣	仁	高	世	聖	世
上	宗	宗	宗	宗	宗	宗	祖	祖
緒光	治同	豐咸	光道	慶嘉	隆乾	正雍	熙康	治順
一八七五	一八六二	一八五一	一八二一	一七九六	一七三六	一七二三	一六六二	一六四四
	一三	一一	三〇	二五	六〇	一三	六一	一八
宣宗ノ孫	文宗ノ子	宣宗ノ子	仁宗ノ子	高宗ノ子	世宗ノ子	聖祖ノ子	世祖ノ子	太宗祖ノ子孫

莊	熹	光	神	穆	世	武	孝	憲	景	英
烈										
帝	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗	宗
一六二八	一六二二	一六二〇	一五七三	一五六七	一五二二	一五〇六	一四八八	一四六五	一四五〇	一四三六
一六	七	一	四七	六	四五	一六	一八	二三	一五	一四
熹宗ノ弟	光宗ノ子	神宗ノ子	穆宗ノ子	世宗ノ子	武宗ノ子	孝宗ノ子	憲宗ノ子	英宗ノ子	宣宗ノ二子	宣宗ノ四子

明治廿二年八月十五日印刷製本落成
同 年八月十九日 出版

定價金三拾五錢

版權登錄

版權
所有

印刷者

大阪府東區北久太耶町二丁目六十六番屋敷
大阪活版製造所

辻田榮助

發行者

大阪府平民

松村九兵衛

大阪府南區心齋橋筋二丁目六十七番屋敷

著者

岐阜縣士族

青山正夫

大阪府西區江戶堀北通二丁目二百七番屋敷寄留

賣弘人

大阪府平民

森本專助

東區南久太郎町四丁目廿八番屋敷

同

大阪府士族

石井鈞三郎

東區備後町四丁目八十五番屋敷

同

京都府平民

福井源治郎

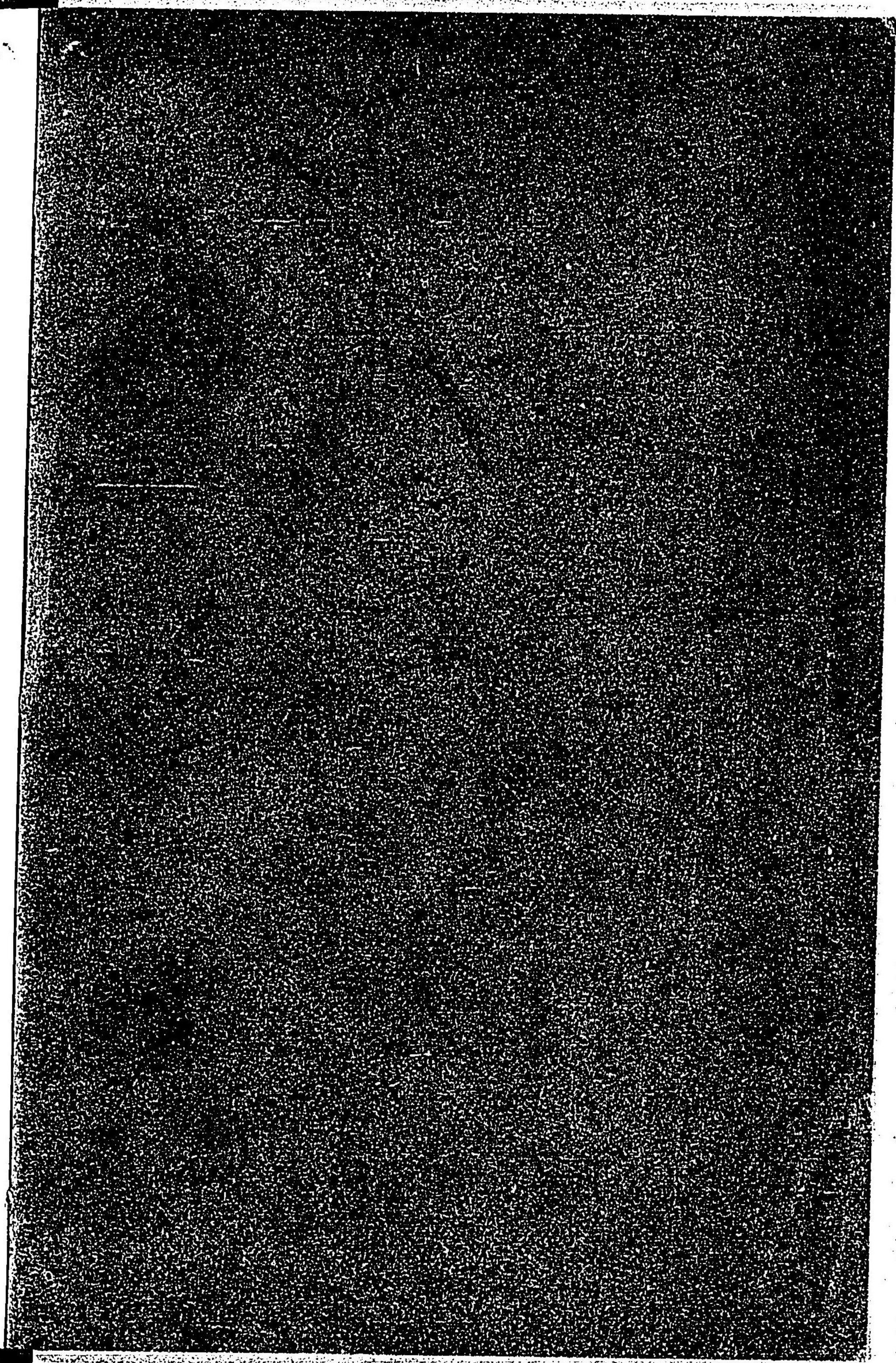
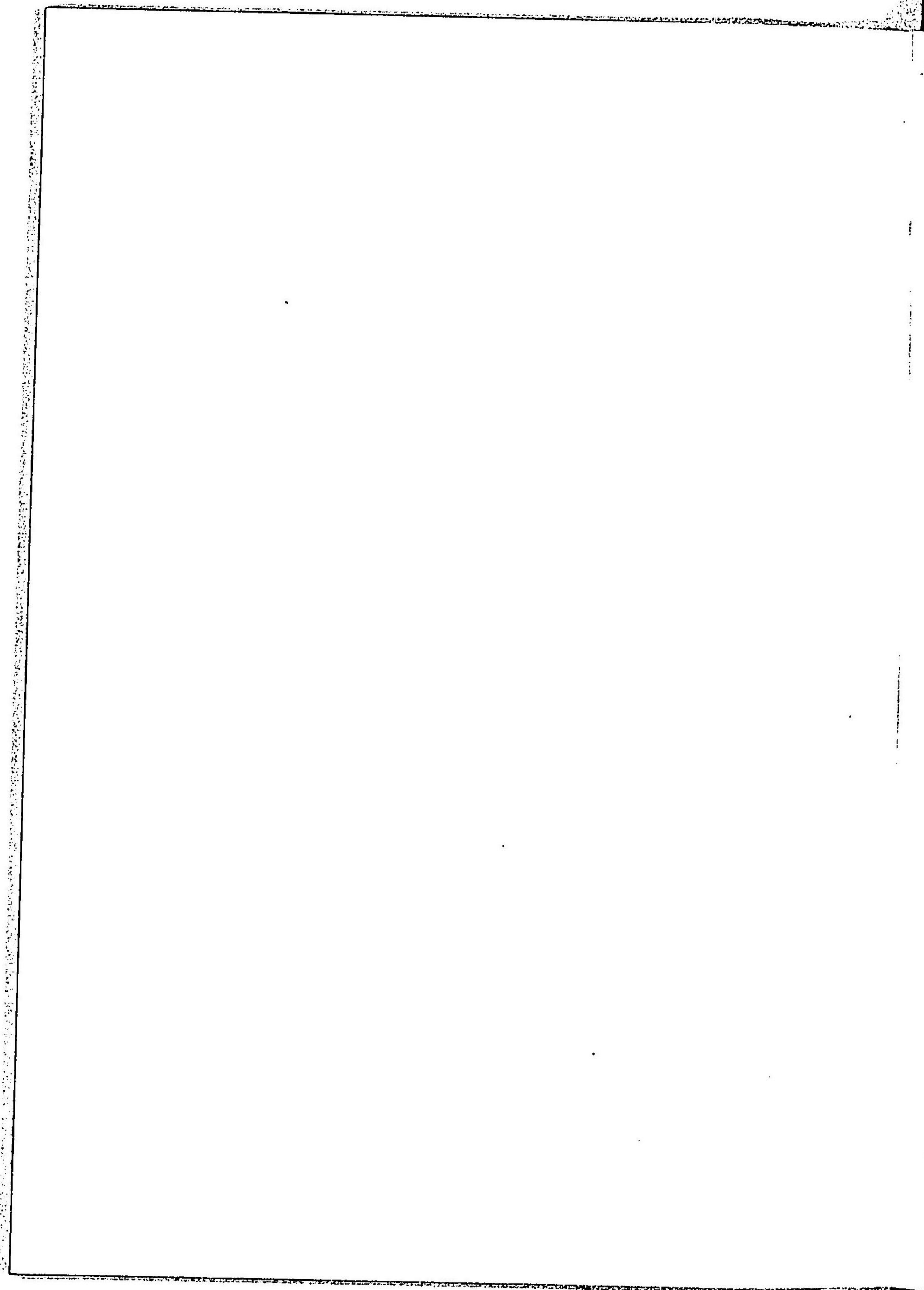
下京區三條通寺町東入

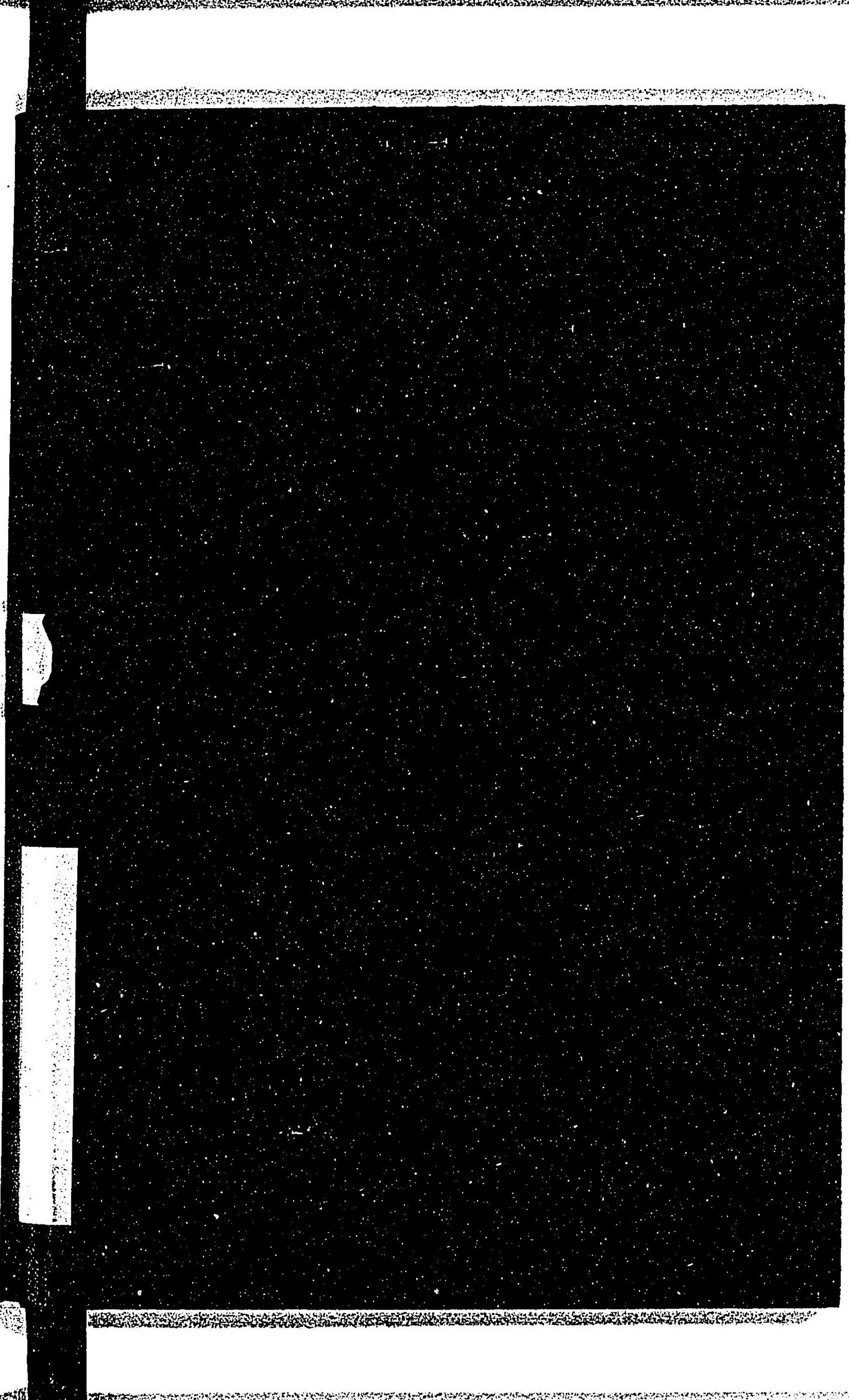
同

東京府平民

吉川半七

京橋區南傳馬町二丁目





特 20
86

支那文明史略

6

国立国会図書館

8